静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第163集

藤　守　遺　跡 Ⅲ

平成16年度　（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第163集

藤　守　遺　跡 Ⅲ

平成16年度　（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

藤守遺跡は、静岡県志太郡大井川町に所在する遺跡である。大井川町は、その名が示すとおり、静岡県中部を流れる大井川の河口に広がる町である。藤守遺跡はこの町の北東部、海岸のほど近くに所在する。

藤守遺跡は、昭和40年代から数度の調査が行われ、弥生時代～近世にいたるまでの各時代の遺構・遺物が発見されている。「藤守」の名は、古来より文献に登場し、中世や近世における開発の歴史も記録に残っている。古くから、この地で人々が生活を営んだことは明らかであった。しかし、調査は断片的なものであり、総体としての実体については不明な部分が多い遺跡でもあった。今回の調査は、道路工事に先立つ調査であった。この工事に伴う先行調査として、平成12年度と14年度に調査が行われている。この２件の調査は藤守遺跡としては面的な調査を実施した数少ない事例であった。この２件の調査の結果、７～８世紀、12～13世紀の集落跡の存在が明るみにでた。平成14年度の調査では、中世初頭の遺構として屋敷地の痕跡とそれを囲む溝が検出され、注目された。また、出土遺物を見ても、駿河と遠江関係の遺物が混在する他、渥美や知多で生産された土器が出土するなど、遠隔地との交流をうかがわせる資料を出土していることは注目できよう。その立地状況から、海上交易との関連を持つ集落とも想定される。

今回の調査では、中世の遺構・遺物を発見した。調査区の北側は大きな自然流路となっていることもわかり、この調査区が集落の北東端部であることが判明した。遺物としては、８点の漆椀が出土したが、漆器が出土したのは藤守遺跡の調査では初めてのことである。藤守遺跡の推定される遺跡範囲は東西約２km、南北約1.5kmと広大なものであり、その実体解明には、まだまだ時間がかかるであろう。しかしながら、調査により少しずつ遺跡の姿が解明されており、地域史解明には欠かすことのできない遺跡であることが判明してきている。今後、いっそうの調査の進展が期待される遺跡といえよう。

現地調査ならびに資料整理にあっては、静岡県島田土木事務所をはじめとする関係機関の御助言、御協力を賜った。文末ではあるが、ここに記して感謝の意を表すとともに、現地調査と資料整理に従事した作業員の労をねぎらい、結びの言葉としたい。

平成17年３月25日

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　　斎　藤　　忠

例　言

1　本書は静岡県志太郡大井川町藤守1476－２他に所在する藤守（ふじもり）遺跡の発掘調査報告書である。

2　当研究所では、これまでに藤守遺跡に関わる報告書を２冊刊行している。３冊目である本書は『藤守遺跡Ⅲ』とした。なお、１冊目は平成13年度に刊行した『藤守遺跡』、２冊目は平成14年度に刊行した『藤守遺跡Ⅱ』である。

3　藤守遺跡の調査は、（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県島田土木事務所から委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

4　現地における調査期間は平成16年10月29日～12月28日である。資料整理期間は平成17年１月14日～３月25日である。

5　調査体制は以下のとおりである。

所　長：斎藤　忠　　副　所　長：飯田英夫　　常務理事兼総務部長：平松公夫
総務部次長兼課長：鎌田英巳　　総務課会計係長：野島尚紀
調査研究部長：山本昇平　　調査研究部次長兼資料課課長：栗野克巳
調査研究員：菊池吉修

6　現地での基準点測量、空中写真撮影、全体図の作成は株式会社フジヤマに委託した。

7　本書で使用した遺構の略号は下記のとおりである。

SD：溝状遺構　　SF：土坑　　SH：掘立柱建物跡　　SP：柱穴・小穴　　SR：流路跡

8　遺構実測図・遺物実測図の縮尺は全て図に示した。

9　調査にあたって、調査区内には国家座標に基づき、一辺10mのグリッドを設定した。グリッドは平成12年度および平成14年度の調査時に設定したものを踏襲しているため、グリッド設定にあたっては、旧測地系を使用している。現地における測量もこれに基づくものである。

なお、グリッドは南北方向についてはアルファベット、東西方向についてはアラビア数字を用い、北西隅の交点を持ってそのグリッドの名称とした。

10　本文中の引用参考文献の表記について、一部を以下のように略す。

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

11　土器・土層の色調は『標準　土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修　1992）に準拠した。

12　木製品・金属製品の保存処理は当研究所保存処理室室長西尾太加二が実施した。遺物撮影は当研究所写真室職員が実施した。

13　本書の執筆は菊池吉修が行った。

14　発掘資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

15　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

目　　次

序
例　　言

第１章　経　　過
　　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の環境
　　第１節　地理的環境 …… 3
　　第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の成果
　　第１節　概　　要 …… 7
　　第２節　調査の方法 …… 8
　　第３節　基本層序 …… 10
　　第４節　遺　　構 …… 12
　　第５節　遺　　物 …… 20

第４章　総　　括 …… 23

図　　版
報告書抄録

挿図目次

図1　大井川町と藤守遺跡の位置 …… 1
図2　藤守遺跡周辺の地形 …… 3
図3　周辺遺跡分布図 …… 4
図4　藤守遺跡位置図 …… 7
図5　平成16年度調査範囲位置図 …… 9
図6　グリッド配置図 …… 9
図7　基本層序模式図 …… 10
図8　藤守遺跡グリッド全体図 …… 10
図9　平成16年度調査範囲全体図 …… 11
図10　調査区西部平面図 …… 12
図11　SD-1～4土層断面図 …… 13
図12　SF-4遺構実測図 …… 14
図13　SF-5遺物出土状況図 …… 15
図14　調査区南部平面図 …… 15
図15　SH-1実測図 …… 16
図16　流路の変遷図 …… 17
図17　SR-1～3土層断面図 …… 18
図18　SD-2・3とその周辺の出土遺物 …… 20
図19　SD-5、SR-2出土遺物 …… 21
図20　SF-5出土漆器とその他の出土遺物 …… 22
図21　藤守遺跡全体図 …… 25

図版目次

図版1　平成16年度調査区全景（北東から）
図版2　平成12・14・16年度
　藤守遺跡調査範囲合成写真
図版3　1　SD-1全景（東から）
　2　SD-3全景（南から）
　3　SD-4全景（東から）
　4　SD-2土層断面（南から）
　5　SD-3土層断面（北から）
図版4　1　SR-1全景（北から）
　2　南部の柱穴群（西から）
図版5　1　SF-5漆椀（13）出土状況（北から）
　2　SF-5漆椀出土状況（東から）
　3　SF-5漆椀（15）出土状況（西から）
図版6　1　SF-5出土の漆椀(外面)
　2　15内面
　3　15底面
図版7　SD-2・SR-2他の出土遺物

挿表目次

表1　周辺遺跡地名表 …… 5
表2　掘立柱建物跡計測表 …… 19
表3　土坑・小穴計測表 …… 19
表4　平成12・14・16年度の調査成果一覧 …… 24
表5　出土遺物計測表 …… 26

第１章　経　　過

第１節　調査に至る経緯

藤守遺跡（ふじもりいせき）は静岡県志太郡大井川町（しずおかけんしだぐんおおいがわちょう）に所在する遺跡である。この遺跡は、昭和40年度以降、数度の調査が実施され（註１）、拠点的集落跡とも想定されている遺跡である。

藤守遺跡は広範囲に渡る遺跡である（図３）。このたび遺跡の南東部を横断するように、（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）（註２）が、実施されるはこびとなった。そのため、工事に先立ち、平成10年度に大井川町教育委員会が工事予定範囲を対象として確認調査を実施した。この確認調査において、遺構・遺物の存在から、本調査を要する箇所が存在することが判明した。これを受け、島田土木事務所と静岡県教育委員会が協議を重ねた結果、平成12年度から調査必要箇所について本調査を実施することとなった。平成12年度と平成14年度には静岡県教育委員会の指導のもと、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が藤守遺跡の本調査を実施した。この２件の調査の結果、古墳時代末期～奈良時代、平安時代～鎌倉時代の集落跡が展開することが明らかとなり、地域の歴史解明には欠かすことのできない遺跡であることが改めて認識された。

本書で報告するのは、平成14年度に本調査を実施した範囲の北側にあたる地点である。この範囲については、1,950㎡を対象とした確認調査が平成15年12月17・18日に静岡県教育委員会により改めて実施された。確認調査では、鎌倉時代以降の遺物が出土するとともに、遺構の存在が明らかとなった。この結果に基づく協議が、島田土木事務所と静岡県教育委員会文化課との間で行われた。協議の結果、遺構・遺物を確認した533.6㎡について本調査を実施することが決定した。本調査は、静岡県教育委員会文化課の指導のもと㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施することになった。現地調査は平成16年10月29日から12月28日まで実施した。資料整理は平成17年１月14日から３月25日まで㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。

図１　大井川町と藤守遺跡の位置

第２節　調査の経過

平成16年度における藤守遺跡の本調査範囲は、平成15年度に実施した確認調査の結果に基づくものである。この確認調査は、平成12年度と14年度に実施した本調査の成果を踏まえて実施された。

１　確認調査

確認調査は平成15年12月17～18日に実施された。調査は、1,950㎡を対象として、５本のトレンチを掘削することによって行われた。実掘削表面積は112㎡である。この結果、確認調査対象範囲の南西部において、山茶椀・漆椀等の遺物が出土し、溝や柱穴、流路跡などの遺構を検出した。遺構・遺物の存在から、遺跡の広がりが明らかになった533.6㎡については、本調査を行うことが決定した。

２　本調査

本調査は平成16年10月29日から開始した。まず、準備作業として資材の搬入を行い、11月２日には現地詰め所を設置した。続いて、５日に調査区周辺に安全フェンスを設置し、８日から重機による表土除去に取りかかった。表土の除去は９日に終了し、10日は表土除去で生じた排土の処理を行った。

人力掘削は11月16日から実施した。調査区内は重機掘削後、湧水により冠水していた。そのため、まず、排水作業を実施した上で、包含層の掘削に取りかかった。包含層掘削は19日には終了したが、17日からは包含層掘削を終えた箇所について遺構検出作業に着手した。遺構検出作業は11月25日まで実施した。17～19日の遺構検出作業では、調査区南部において13基の柱穴と３基の土坑を検出した。22日には調査区西端部において、１条の溝状遺構と５基の柱穴、１基の土坑を検出し、22～25日には調査区中央部から北東部にかけて流路跡と溝をそれぞれ３条、土坑を１基検出した。なお、包含層掘削と遺構検出作業の過程で、山茶椀片等が出土した。また、19日には測量基準杭の設置を行っている。

検出した遺構については、検出状況の記録を取った後、24日から掘削に取りかかり12月16日まで作業を実施した。なお、遺構からは山茶椀や漆椀等が出土した。遺物については、随時、出土状況の実測と撮影を行った上で取り上げを実施した。また、各遺構は掘削が終了した段階で、写真撮影を実施した。12月16日には、各遺構の掘削並びに遺物の取り上げを終了し、17日と18日に調査区内の清掃と周辺の片づけを行い、18日に空中写真撮影を実施した。20～21日は足場を組み立てて調査区全景写真の撮影と個別遺構の撮影、遺構個別の実測を実施し、掘削作業を終えた。なお、掘削作業と併行して、出土遺物の洗浄・注記作業を行っている。

12月22日からは撤収作業に入った。22日と24日に資材の搬出作業を行い、24日に安全フェンスの撤去、27日に現地詰め所の撤去を行った。調査区は22日と28日に重機を用いて埋め戻し作業を実施した。12月28日には撤収作業を終了し、現地調査を完了した。

３　資料整理

資料整理は平成17年１月14日から㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。１月は遺物の接合と写真の整理、遺構図の版下作成を行い、２月は遺物の復原と実測・トレース、遺構図のトレース、報告書の編集作業を行った。また、これと併行して、報告書本文の作成と木製品の保存処理作業を行っている。３月には収納作業と校正作業を行い、３月25日にこれらの作業を全て終了し、平成16年度における藤守遺跡の資料整理作業を完了した。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

藤守遺跡は静岡県志太郡大井川町に所在する遺跡である。大井川町はその名が示すように、大井川沿いの町である。町名の由来となった大井川は赤石山脈に源を発し、静岡県のほぼ中央を流れ、駿河湾に注ぐ河川である。大井川は上中流域では蛇行を繰り返しながら南流するが、その沖積平野に至ると、牧ノ原台地に流れを遮られ、向きを大きく東に変える。河口付近では、再び南東に流れを変えて駿河湾へと向かう。大井川河口左岸の沖積平野に大井川町は所在する。大井川町の東には、太平洋が広がっており、北は焼津市、西は藤枝市に接し、大井川を隔てた南西は島田市、南は榛原郡吉田町となっている。藤守遺跡は大井川町の北東部に所在し、ＪＲ藤枝駅からは6.7km、東名高速道路吉田ＩＣからは7.0kmの距離である。海岸からは約1.1mの距離で、遺構検出面の標高は２m前後であった。

先述したとおり、藤守遺跡は大井川の沖積平野に立地する遺跡である。遺跡の自然立地条件については、既に刊行されている『藤守遺跡』（静文研2002）、『藤守遺跡Ⅱ』（静文研2003）に詳しく記されている。「藤守遺跡は大井川により形成された扇状地と海岸部の低地の境界部に立地する遺跡として位置づけられ、大井川の河川堆積層により、地盤が形成されている」というのがその概略である。藤守遺跡は縄文時代～近世の遺跡であるが、近世初頭以前の大井川の流路は現在と大きく異なるものであった。『大井川町史』（大井川町1984）によると、更新世の大井川は現在の小笠山付近に河口があり、遠州灘に注ぎ、更新世末期の大井川は現在の牧ノ原台地が隆起したため、下流域は東に向きを変え、駿河湾に注ぎ志太平野を形成したことが述べられている。続いて、「歴史時代の初期」になると大井川は、栃山川の辺りを主流とし、それ以前は木屋川、更に前は黒石川の辺りを流れていたとされている。これら３河川はいずれも藤守遺跡より北方を流れる河川である。平安時代、貞観年間（859～876年）の氾濫により、木屋川・栃山川筋は浅瀬となり、大井川は流路をより南に移したと言われている。大井川が栃山川筋の流路をとっていた時代に形成された微高地上に、藤守遺跡の集落は形成されたものと考えられる。

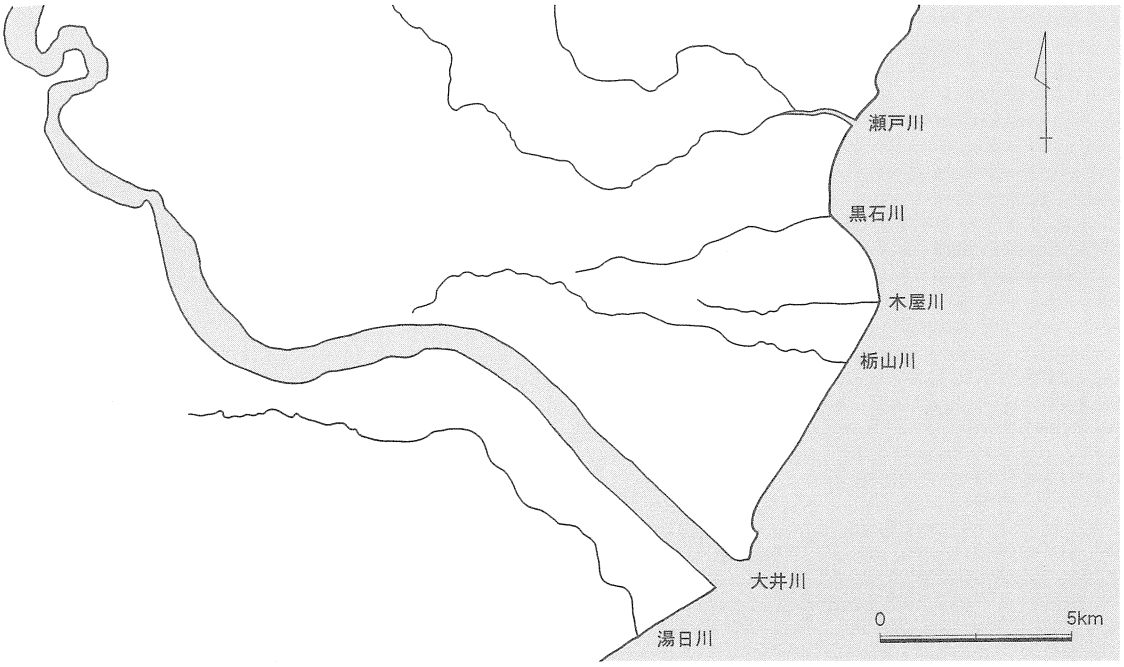


図２　藤守遺跡周辺の地形（1/200,000）

第２節　歴史的環境

藤守遺跡の歴史的環境は、先に刊行された『藤守遺跡』（静文研2002）、『藤守遺跡Ⅱ』（静文研2003）において、詳細に記されているが、改めて、概略について記す。ただし、藤守遺跡の所在する大井川町においては、調査によりその実体が判明している遺跡は藤守遺跡の他にはない。そのため、古墳時代以前については、近接する市町における遺跡の様子から歴史的環境を概観したい。

旧石器時代　当該期においては、僅かに大井川右岸の牧ノ原台地上の数遺跡で、遺物の出土が記録されている程度である。島田市の吹木原遺跡やミョウガ原遺跡（21）等でナイフ形石器が出土している。少例であり、歴史像の解明には至っていないが、牧ノ原台地上で古くから人々が活動していたことは明らかである。今後、類例の増加が期待され、それとともに実体が解明されることと考えられる。

縄文時代　縄文時代になると、遺跡の数は増加する。藤守遺跡内でも、字横町から縄文土器が出土したと伝えられている。ただし、断片的な資料であり、詳細は不明である。藤守遺跡を除くと、縄文時代の遺跡はほとんどが丘陵上に所在する。特に多くの遺跡が存在し、調査されているのは大井川右岸、牧ノ原台地の東北縁部である。その多くは中期の集落跡であるが、島田市中原遺跡（35）の様に草創期・早期の遺物を出土した遺跡もある。大井川左岸でも縄文時代の遺跡は調査が行われている。代表的な遺

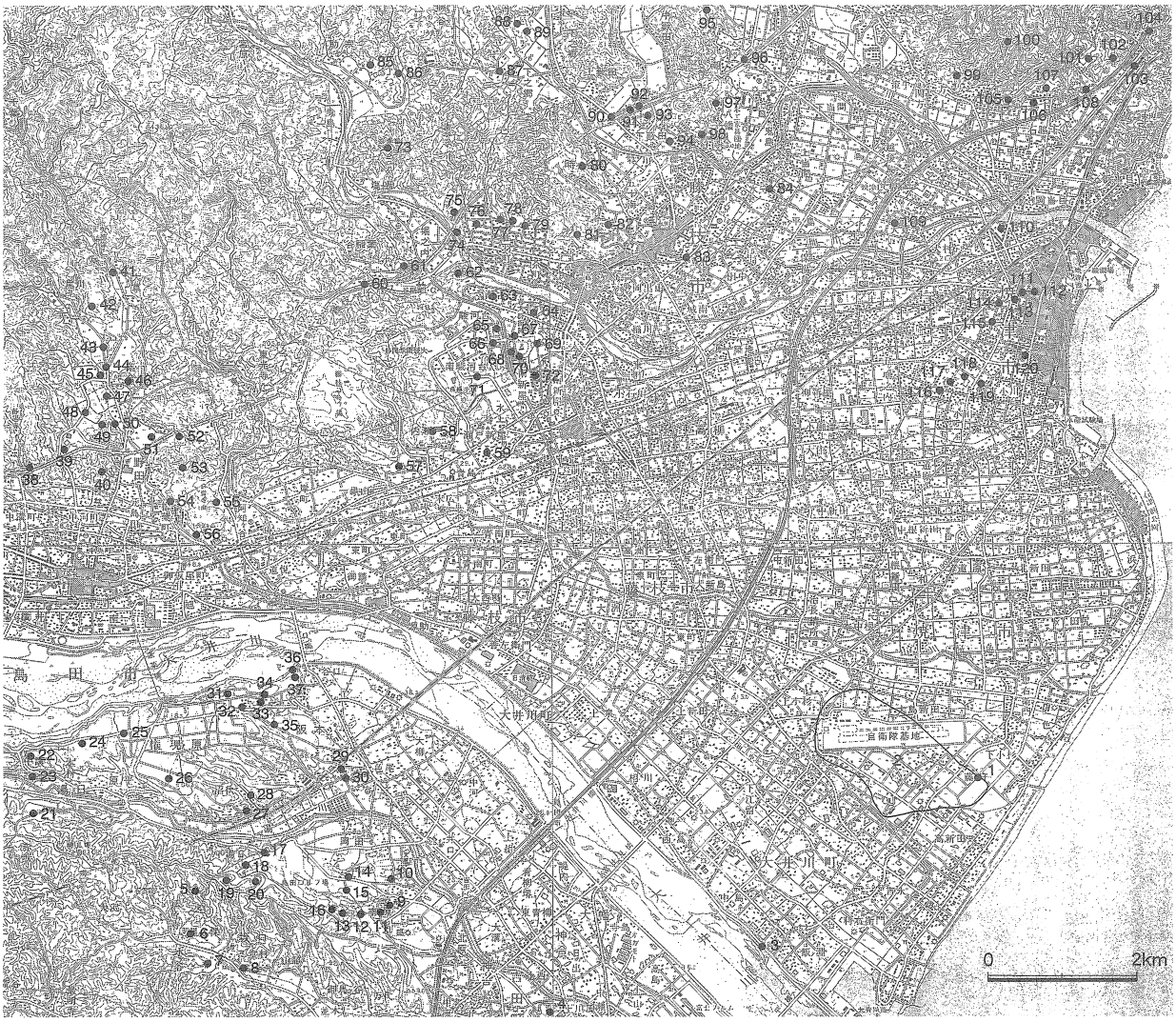


図３　周辺遺跡分布図（1/100,000）

跡の例として、早期～後期の遺物が出土した島田市山王前遺跡（43）等があげられる。縄文時代のいずれの遺跡も丘陵上、あるいはその縁辺部に所在する状況にある中で、沖積平野の裾部とも言える大井川町から土器片が出土していることは、注目できよう。

弥生時代　弥生時代になると平野部でも遺跡が確認されている。藤守遺跡でも、弥生土器が出土したと伝えられている。ただし、本調査では遺構・遺物の検出には至っていないため、実体の解明には至っていない。さて、周辺遺跡の状況であるが、弥生時代の遺跡は大井川左岸で多く調査され、中期後半以降のものが主体を占める。弥生時代の遺跡の中で特に注目したいのは、焼津市の小深田西遺跡（118）や道場田遺跡（117）である。これらの遺跡は海岸部に近い低地に所在し、藤守遺跡と近い立地状況と言える。小深田西遺跡では竪穴住居跡が調査され、道場田遺跡では方形周溝墓が調査されている。ともに弥生時代の終わり頃に位置づけられる。なお、縄文時代の遺跡が多く存在した牧ノ原台地東北縁部では、弥生時代の遺跡は数少ない。宮裏遺跡（29）で中期の土器が出土している程度である。

古墳時代　古墳時代になると、志太平野とその周辺の丘陵部における遺跡数は飛躍的に増加する。その多くは、後期に急増する古墳群である。後期の古墳群はその大半が、丘陵斜面あるいは平坦部に構築されるが、中には焼津市の塩津古墳群（111）のように、海岸に近い微高地上に構築されたものもある。藤守遺跡でも古墳の石材らしきものが存在したことが伝えられており、塩津古墳群のような古墳が存在した可能性も考えられる。古墳は前期や中期のものも存在する。前期の古墳は数が少ないが、島田市の鳥羽美古墳（48）等が調査されている。中期になると、藤枝市では若王子古墳群（81）の様な、いわゆる初期群集墳が調査されている。なお、藤枝市の高田観音前２号墳、荘舘山１・２号墳（74）、島田市の愛宕塚古墳（37）は当地における数少ない前方後円墳であり、いずれも後期の所産である。

古墳の他に集落跡も調査されている。藤守遺跡でも古墳時代後期～奈良時代前半の集落が調査されている。牧ノ原台地北東縁部においても、青木原遺跡（32）等の同時期の集落が多く確認されている。この他に前期や中期の集落跡も調査されている。焼津市の小深田遺跡（119）は前期の集落、宮ノ腰遺跡（115）

表１　周辺遺跡地名表

1	藤守遺跡Ⅲ	25	原ノ平遺跡	49	城山１号墳	73	経塚山経塚	97	八幡・大谷古墳群
2	藤守遺跡	26	えびす森遺跡	50	居倉遺跡	74	荘館山古墳群	98	女池ヶ谷古墳群
3	飯渕経塚	27	沼伏古墳	51	波田古墳群	75	白砂ヶ谷古墳群	99	宮腰古墳群
4	小山城跡	28	地蔵原遺跡	52	波田遺跡	76	稲荷山古墳群	100	笛吹段古墳群
5	御陣場古墳	29	宮裏遺跡	53	二俣遺跡	77	原・大谷古墳群	101	高崎古墳群
6	星久保古墳群	30	高根森古墳群	54	法信寺古墳群	78	越ヶ谷古墳群	102	花沢城跡
7	水ヶ谷経塚	31	尼沢遺跡	55	東照寺古墳	79	翁山古墳群	103	保録ヶ谷古墳群
8	海戸遺跡	32	青木原遺跡	56	白岩寺古墳群	80	時ヶ谷・五鬼免古墳群	104	兎沢古墳群
9	向山古窯跡群	33	宮上遺跡	57	岩田山古墳群	81	若王子古墳群	105	宮ノ久保古墳群
10	南原古墳	34	敬満神社経塚	58	内瀬戸古墳群	82	釣瓶落古墳群	106	風尾遺跡
11	南原遺跡	35	中原遺跡	59	瀬戸古墳群	83	郡遺跡	107	筧沢古墳群
12	南原瓦窯跡群	36	谷口原古墳群	60	蛭ヶ谷遺跡	84	水守遺跡	108	谷崎古墳群
13	南原古窯跡	37	愛宕塚古墳	61	谷稲葉・高草古墳群	85	助宗古墳群	109	大覚寺遺跡
14	宮裏中原古墳群	38	旗指古窯跡	62	五州岳古墳	86	助宗古窯跡群	110	落合遺跡
15	竹林寺廃寺跡	39	田ノ谷遺跡	63	西之宮古墳群	87	葉梨館遺跡	111	塩津古墳群
16	六千ヶ谷古窯跡群	40	鵜田古墳群	64	九景寺古墳群	88	衣原古墳群	112	道下遺跡
17	水掛渡Ａ古墳群	41	上反方遺跡	65	萩ヶ谷Ａ古墳群	89	衣原古窯跡	113	道添遺跡
18	水掛渡Ｂ古墳群	42	大津城跡	66	萩ヶ谷Ｂ古墳群	90	上藪田モミダ遺跡	114	蛭田遺跡
19	水掛渡Ｃ古墳群	43	山王前遺跡	67	御子ヶ谷遺跡	91	上藪田川の丁遺跡	115	宮ノ腰遺跡
20	水掛渡Ｄ古墳群	44	落合遺跡	68	秋合古墳群	92	鳥内遺跡	116	小川城跡
21	ミョウガ原遺跡	45	矢崎遺跡	69	秋合遺跡	93	東浦遺跡	117	道場田遺跡
22	屋敷原遺跡	46	菅ヶ谷古窯跡群	70	山廻遺跡	94	下藪田遺跡	118	小深田西遺跡
23	丸山古窯跡	47	石成遺跡	71	滝ヶ谷古窯跡	95	堤ノ坪古墳群	119	小深田遺跡
24	東鎌塚原遺跡	48	鳥羽美古墳	72	南新屋瓦窯跡	96	潮城跡	120	赤塚遺跡

では中期の竪穴住居跡の他祭祀遺構が確認されている。藤守遺跡でも古墳時代前期に位置づけられる遺物が過去に出土している。藤守遺跡、あるいはその周辺にこの時期の集落が存在した可能性も考えられる。なお、平野を取り巻く丘陵部では、古墳時代後期に位置づけられる窯跡も調査されている。

奈良時代以降　律令期になると、藤守遺跡の周辺は遠江国に属する。ただし、当時の大井川の流路との関連から、駿河国に属していた時期がある可能性も指摘されている（静文研2003）。藤守遺跡では古墳時代末から続く集落が奈良時代にも継続していたようである。この時代、周囲の遺跡として注目できるのは、志太郡衙跡と推定される御子ヶ谷遺跡（67）、益頭郡衙跡と推定される郡遺跡（83）である。焼津市小川城遺跡（116）は小川駅家、島田市宮上遺跡（33）周辺は初倉駅家に関連する遺跡と考えられている。また、奈良時代初期の創建とされる竹林寺廃寺跡（15）も注目できる遺跡である。生産遺跡として注目できるのは、８～12世紀に操業される藤枝市助宗古窯跡群（86）で、その製品は志太平野や静清平野に供給されている。また、平安時代中期以降になると、島田市や金谷町で灰釉陶器や山茶椀が生産される。旗指古窯跡（38）はその代表的な遺跡である。なお、島田市居倉遺跡（50）は物資の集積地としての津的な性格を有する遺跡の可能性が指摘され、旗指古窯跡との関連も想定されている。藤守遺跡では平成12・14年度の調査で山茶椀が出土している。遺跡から出土した山茶椀の産地を見ると、同時期における周囲の遺跡では東遠江産が席巻する状況にある中、藤守遺跡では一定量の割合で湖西・渥美産の山茶椀が含まれる。このことから、藤守遺跡は海上交易との関わりも想定されている。

さて、平安時代中期以降の荘園制の発達に伴い、この地に関連する史料が残されている。藤守遺跡周辺における代表的な荘園としては、益津荘や葉梨荘、質侶荘、初倉荘などが知られている。また、小杉御厨、大津御厨、大津新御厨、方ノ上御厨、小楊津御厨、岡部御厨等の御厨も存在する。これらの中でも藤守遺跡と関連が深いのは初倉荘である。初倉荘については、「建暦元（1211）年七月日八条院領初倉荘注文案」の中で、保延元（1135）年に皇后宮（鳥羽上皇の皇后泰子）が宝荘厳院に初倉荘を寄進したことが記されており、12世紀前半には院領荘園であったことが判明している。その成立や当時の内部構造を示す史料は残されていないが、静岡県1994によると、初倉荘は11世紀末～12世紀初頭に成立し、保延元年の寄進以前は摂関家領の荘園であったようである。初倉荘の本家は宝荘厳院以後、幾度か移り変わり、永仁７（1299）年に大井川以東の４郷が亀山法皇から南禅寺に（禅林寺）に寄進された。この時の寄進状の中に、「藤守」の名が残されている。これ以後、初倉荘の東半分は南禅寺領初倉荘と呼ばれている。南禅寺領初倉荘は「南禅寺文書」の元亀（1501）年の目録によると、「初倉荘五ヶ郷　守護横領」と記され、この頃までに今川領内に組み込まれていったようである。16世紀後半今川家の勢力が衰えると、武田、徳川、中村がこの地を領有し、江戸時代に至る。

ところで、大井川は有史以来、数多くの洪水を起こしているが、このことはこの地の景観にも少なからず影響している。大井川町では水害を抑えるため、三角屋敷や舟形屋敷と呼ばれる囲い土手を持つ屋敷や、輪中が形成された。藤守遺跡の所在する藤守も藤守輪中として知られているが、藤守輪中や小杉輪中の構築は荘園や御厨の成立と深い関わりを持つことが指摘されている（静岡県1994）。この地区の開発の歴史は中世、あるいはそれ以前に遡るようである。藤守遺跡は調査の結果、奈良時代に集落が断絶した後、平安時代末期に再び集落が形成されることが判明している。平安時代末期の集落は、荘園開発の一環として形成されたものである可能性もある。なお、藤守の大井八幡宮に伝えられる「藤守の田遊び」は、中世荘園村落における農業祭祀の生きた姿として国指定重要無形文化財としてとして登録されている。藤守地区は文献史料や考古資料等、多角的な観点から中世荘園について考える資料を持つ地域であることが注目できる。

第３章　調査の成果

第１節　概　　要

平成16年度における藤守遺跡の調査では、古墳時代から近世に至るまでの遺物が出土し、掘立柱建物跡１棟、流路跡４条、溝状遺構５条、土坑５基等を検出した。ここでは調査の概要を時期別に記す。

まず、古墳時代から概観する。この時期の遺物としては、須恵器と土師器が出土している。須恵器は包含層から、土師器は溝状遺構や流路跡の覆土からの出土であり、いずれも流れ込みによるものと解釈できる。平成12年度の調査では、この時期の遺構を検出しているが、今回の調査では検出されなかった。古墳時代の集落は、今回の調査対象地点までは広がっていなかったと考えられる。

平安時代末～鎌倉時代初頭については、SD -1・2・5、SR -2等からこの時期の遺物が出土している。出土したのは山茶椀であるが、いずれも東遠江産のものであった。前回までの調査では、一定量の湖西・渥美産の山茶椀が含まれていたが、今回の調査は、これまでとは若干異なる出土傾向であったと言える。遺構については、いずれも時期を特定し難いものであった。SD -2・SR -2では遺構底面から山茶椀が出土している。これらの遺構は、鎌倉時代前期以降の遺構と言える。調査区の南半部で検出した掘立柱建物跡とその周辺の小穴や土坑、調査区北西部の遺構も覆土の状況から、鎌倉時代の所産と考えられる。自然流路については、SR -1が初めに形成され、これがある程度埋没した段階で、SR -2・4が形成されたと考えられる。SR -3については、SR -2より後出するものと捉えられる。これら４条の自然流路は19世紀以降に埋め立てられ、整地される。SF -5はこの整地層よりも古く位置づけられ、戦国期末～近世のものと考えられる漆椀がまとまって出土している。なお、近代～現代にかけて、この調査区は数度の整地が行われているようである。平成15年度に実施した確認調査の成果と今回の調査成果から勘案すると、今回の調査範囲より北側は自然流路とその氾濫原が広がっており、藤守遺跡における中世の集落域は今回の調査区より北側には広がっていないものと捉えられる。

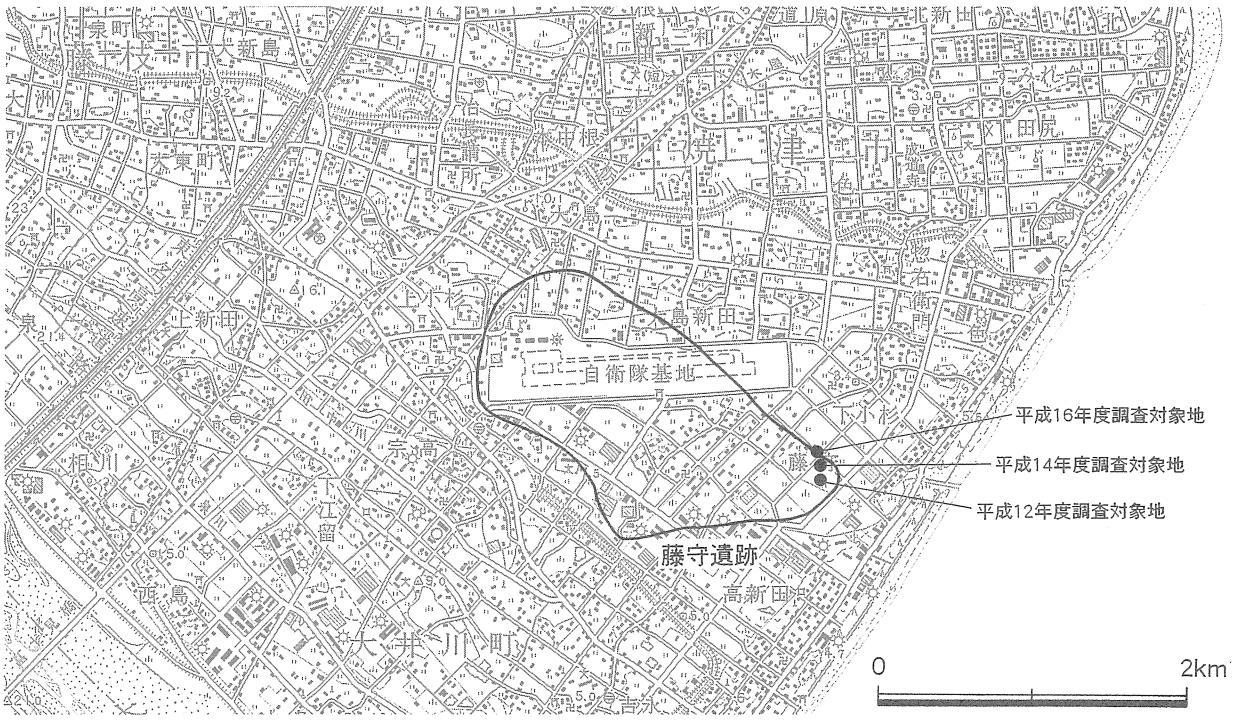


図４　藤守遺跡位置図（1/50,000）

第２節　調査の方法

１　現地調査

平成16年度における藤守遺跡の調査対象面積は533.6㎡である。現地調査は平成16年10月29日に開始し、12月28日まで実施した。

調査にあたっては、10m幅のグリッドを設定した。第１章に述べたとおり、平成16年度における藤守遺跡の調査範囲は、14年度に実施した調査範囲の北側に隣接する。そのため、平成12・14年度の調査時に設定したグリッドを踏襲してグリッドを設定した。グリッドは北西端部を起点とし、南北方向をアルファベット、東西方向はアラビア数字を付した。グリッド名は北西交点をもって呼称している。なお、平成14年度の調査範囲の一部と平成16年度の調査範囲は、平成12年度の調査時に設定したグリッドの外側にあたる。そのため、この範囲については小文字のアルファベットを南から北に向けて付した。また、平成12年度と14年度の調査成果と整合させるため、基準点とグリッド杭の設置にあたっては、日本測地系（旧測地系）を使用し、現地ではこれを基準として実測作業を行った。

掘削作業は、表土についてはバックフォーを用いて除去を行い。遺物包含層と遺構検出、遺構掘削は人力で行った。また、重機による表土除去の際、排土処理にはクローラーダンプを併用した。なお、安全確保のため、調査区周辺にはフェンスを設置したうえで作業を行った。また、調査区内は常時、湧水があり、水中ポンプで排水作業を行った。

測量作業は、遺物出土状況並びに個別遺構の実測については、トータルステーションとレベルを使用し、縮尺1/20を基本として実施した。全体図の作成にあたっては、ラジコンヘリを使用した空中写真撮影に基づき1/20・1/100で図化を行った。

現地における写真撮影については、全体写真と景観写真については、ラジコンヘリを用いて撮影を行い、６×4.5判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用した。その他の撮影は、35㎜判のカラーネガフィルム・モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、６×７判と４×５判のモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用した。なお、全体図の作成並びに空中写真撮影、基準点の設置は株式会社フジヤマに委託した。

現地調査では、この他に出土遺物の洗浄作業と注記を行い、出土遺物台帳の作成も併せて実施している。漆器や金属製品については劣化遅延措置を行った。

２　資料整理

資料整理については、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所本部にて実施した。整理期間は、平成17年１月14日～３月25日である。遺物は種別の仕分け作業を初めに行った。土器類については、接合・復原作業の後、実測を行った。漆器と金属器については、劣化遅延措置を行った後に、実測を行った。これらの実測図に基づき、版組を行い、トレース作業を実施した。遺構については、現地で作成した1/20図面に基づき、版組を行った上で、トレース作業を行った。これらの作業と併行して、報告書の編集と観察表の作成を実施した。遺物撮影は、当研究所写真室にて、35㎜判と６×７判のカラーリバーサルフィルムとモノクロフィルム、４×５判のカラーリバーサルフィルムを使用して実施した。なお、今回の調査で撮影した調査区全景俯瞰写真と、平成12年度と平成14年度に撮影した全景俯瞰写真の合成作業は株式会社フジヤマに委託した。遺物と記録類の収納作業は、上記の作業が全て終了した段階で実施した。

図５　平成16年度調査範囲位置図（1/5,000）

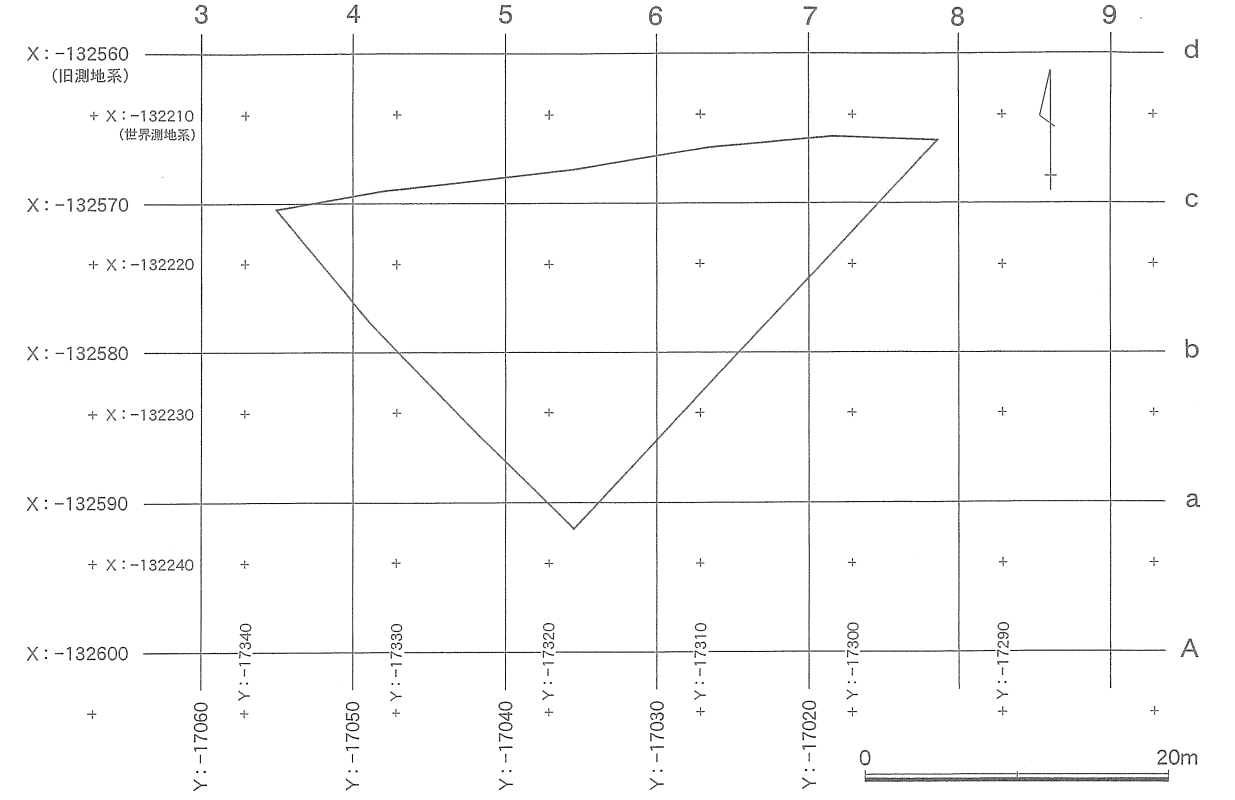
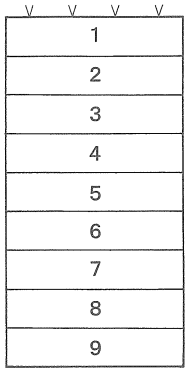


図６　グリッド配置図（1/500）

第3節　基本層序

藤守遺跡全体の基本層序については平成12年度刊行の報告書に詳細に記されている。以後の調査は、この基本層序を踏まえている。平成16年度の調査でもこれに倣った。

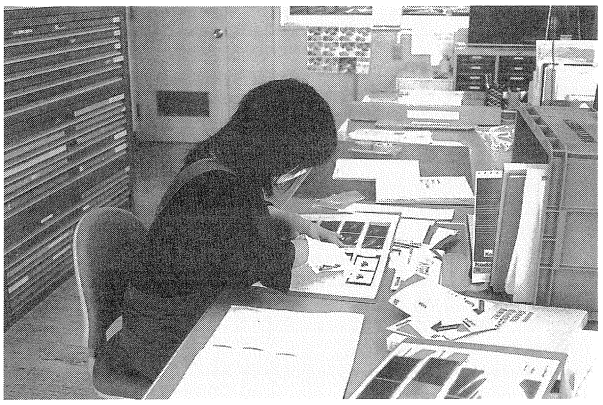
図７は平成12・14年度刊行の報告書に基づく、基本層序の概念図である。１層土、２層土、４層土、５層土、６層土、９層土が今回の調査区内においても、確認できた層位である。この内、遺構検出面となったのは９層土の上面である。なお、調査区北半では上述の層位が確認できたが、南半では４層土の直下が９層土となっており、狭い調査対象範囲ではあるが、層位の様相には若干の差異があった。



1層土：	表土	近現代の水田耕作土、今回の調査区では厚さ20～50cm
2層土：	灰色シルト　(5Y4/1)	締まり悪く、縦根発達
3層土：	灰オリーブ色粘土質シルト　(5Y4/2)	4層土撹拌
4層土：	灰色シルト質粘土　(5Y5/1)	酸化マンガン斑紋・酸化鉄斑紋・管状斑紋・暈管状斑紋
5層土：	灰色シルト質粘土　(5Y4/1)	酸化鉄多量・酸化マンガン少量、4層より粘性高い
6層土：	オリーブ黒色シルト質粘土　(5Y3/1)	遺物包含層、酸化マンガン多量
7層土：	灰色シルト質粘土　(5Y4/1)	
8層土：	灰オリーブ色粗砂混じり粘土　(7.5Y4/2)	
9層土：	オリーブ黒色砂礫層　(5Y3/1)	地山、この層の上面が遺構検出面

図７　基本層序模式図

現地調査の状況



資料整理作業の状況

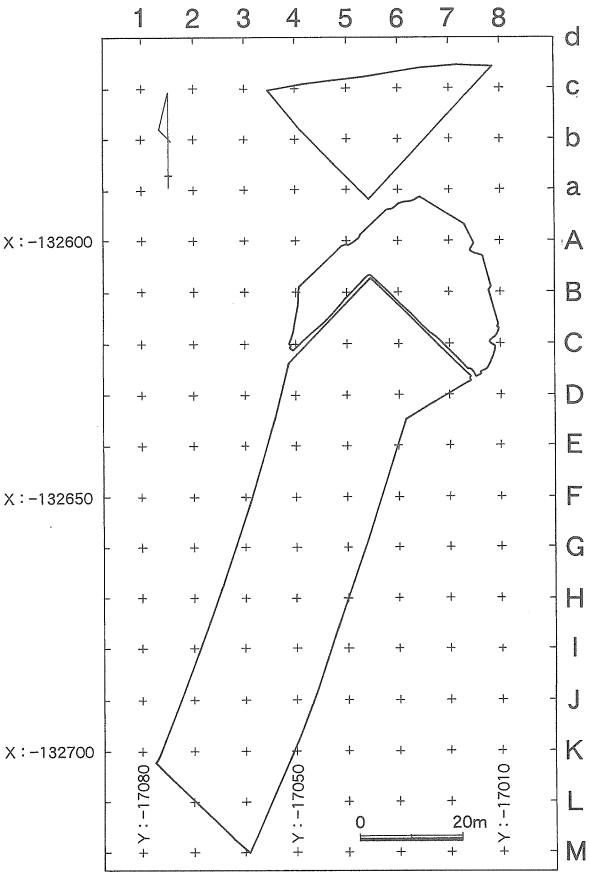


図８　藤守遺跡グリッド全体図

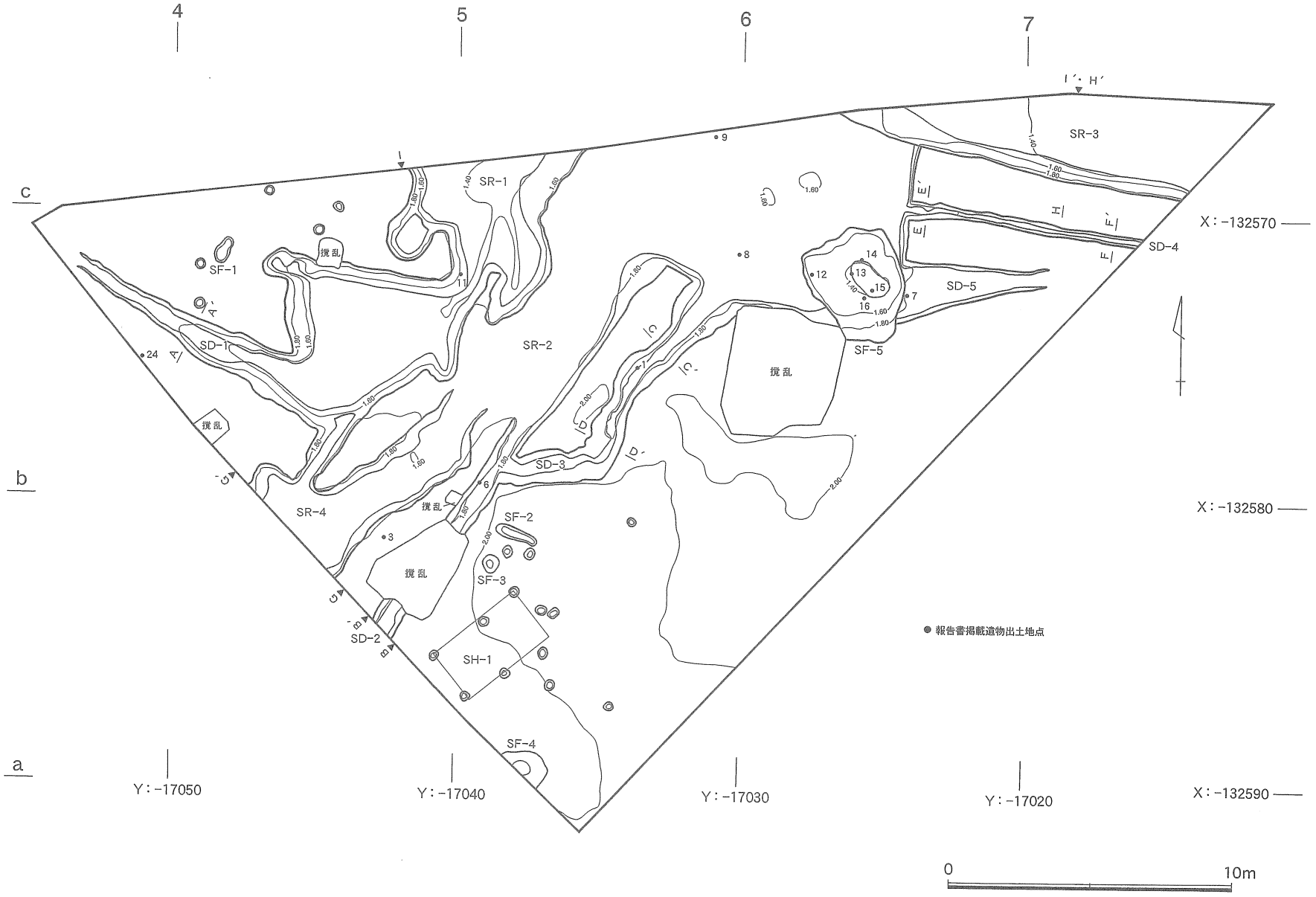


図９　平成16年度調査範囲全体図（1/200）

第4節　遺　　構

1　溝状遺構

(1)　SD-1（図10、11）

SD-1は調査区の西部で検出した。この遺構は、北西から南東方向へ向かって流れる溝状遺構であり、南東に行くに従い、深さと幅を増してSR-1・2へつながる。検出長は8.4mである。幅は西端で0.4m、SR-1と接する部分で1.8m、深さは最深部で0.4m、方位はN-60°-Wである。

この遺構からは、山茶椀の小椀あるいは小皿の細片が1点と、表面の風化が著しい土師器の破片が最下層から出土している。細片であるため、遺物は時期を特定し難いものであるが、覆土から山茶椀が出土していることを勘案すると、中世以降の溝状遺構と考えられる。なお、SD-1と連続するSR-1・2は中世以降に位置づけられる遺構である。SD-1の覆土は、SR-1・2の覆土に近い。そのため、SD-1はSR-1・2と近い時期に埋没したものと考えられる。

(2)　SD-2（図9、11）

SD-2は調査区の南部で検出した溝状遺構であり、中央部には大きな撹乱が入る。この溝状遺構は、方位をN-34°-Eにとり、検出長は8.9m、最大幅1.0m、深さは南西側が最も深く0.2m、北東側が0.1mであった。SD-2は調査区外に続き、北東側はSR-2によって切断されている様子がうかがえた。

SD-2からは底面や最下層から山茶椀や渥美産の甕片、砥石が出土した（図18－2～6）。このうち、山茶椀は残存状況が悪いものの、Ⅲ期-1～2のものと考えられ、13世紀前葉～中葉に位置づけられる（註3）。なお、SD-2より新しい時期の遺構と考えられるSR-2でも、同時期の山茶椀が出土している。そ

図10　調査区西部平面図（1/100）

のため、SD -2の時期については、13世紀前半の遺構と捉えられる。

(3)　ＳＤ-3（図９、11）

SD -3は調査区の中央部で検出した南北方向の溝状遺構である。この遺構の南端部はSD -2に接し、北端部はSR -2を覆った整地層に切断される遺構である。他の溝状遺構が直線的であったのに対し、SD -3は緩やかなＳ字状の平面形態をとる。検出長は11.5m、幅は最大で1.9mである。深さは南側が浅く0.1m、北側は0.3mである。

SD -3では最上層から、近世陶磁器の細片とカワラケの細片が出土し、最下層からは山茶椀の細片が出土した。遺物からは、中世～近世に遺構の時期を求めることができるが、長期間存続した溝とは考えがたい。山茶椀は周囲からの流れ込みによるものと考えられることから、近世の遺構と解釈したい。あるいは、SR -4の水流が溢れ出ることで形成された、自然流路の可能性も考えられる。

(4)　ＳＤ-4（図９、11）

SD -4は調査区の東部で検出した。この遺構は東西方向の溝状遺構で、その方位はＮ-80°-Ｗである。検出長7.7m、最大幅0.6m、深さ0.1m前後の規模である。なお、東側は調査区外に続いている様子がうかがえた。

この遺構からは遺物が全く出土しなかったため、時期を特定することは難しい。覆土は中世以後の堆積層である４層土に似ていることから、近世以降の遺構であろう。

(5)　ＳＤ-5（図９）

SD -5は調査区の東部、SD -4の約1.5m南で検出した溝状遺構である。この遺構はＮ-85°-Ｅに方位をとり、検出長5.6m、最大幅2.1mの規模である。深さは西側が深く0.2m、東側に向かうに従い浅くなり消滅する。覆土はSD -4と同じであり、近世の遺構と考えられる。なお、この遺構からは、山茶椀が１点出土している（図19－７）。底面からの出土であるが、周囲からの流れ込みによるものと考えられる。

２　土　　坑

(1)　ＳＦ-1（図９）

SF -1は調査区北西部、SD -1の北側で検出した土坑である。不正形な楕円形の平面形を持つ遺構で、長径0.9m、

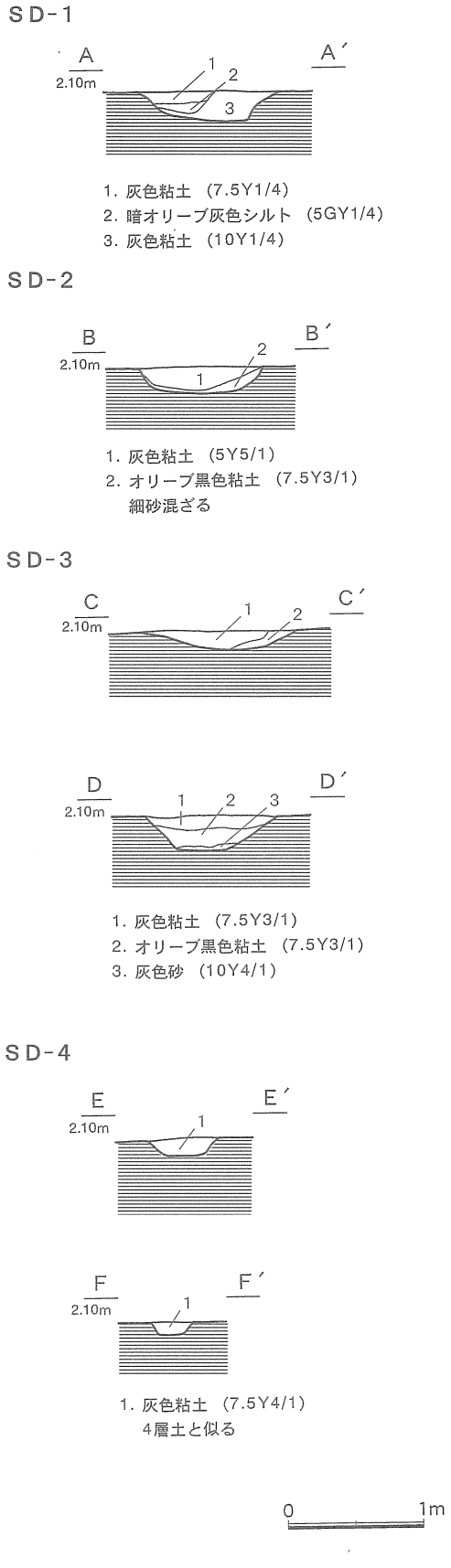


図11　ＳＤ-1～4土層断面図（1/50）

短径0.5m、深さは0.1mの規模である。

なお、この遺構からは、遺物が出土しなかった。時期は特定し難いが、覆土は後述するSH-1の柱穴の覆土と似ている。そのため、中世の遺構の可能性が考えられる。

(2) ＳＦ-2（図14）

SF-2は調査区の南部、SD-2の0.8m東側で検出した土坑である。平面形は不正形な楕円形で、規模は長径1.5m、短径0.4m、深さ0.05mである。

この土坑からの出土遺物はなかった。遺構の時期については明らかにし難いが、SH-1や周囲の柱穴と覆土は近似するため、鎌倉時代前半のものと考えられる。

(3) ＳＦ-3（図14）

SF-3は調査区の南部、SF-2の0.7m南方で検出した平面が円形の土坑である。規模は最大径0.6m、深さ0.2mである。

この遺構からは風化の著しい土師器の細片が１点出土した。遺構の時期については断定できないが、覆土はSH-1や周囲の柱穴と類似し、これらと同時期の鎌倉時代前半の遺構と考えられる。

(4) ＳＦ-4（図12）

SF-4は調査区南部で検出した土坑である。検出できたのは土坑の一部であるが、平面形は直径1.7m程度の円形になると推定される。残る部位については調査区外に続いている様子がうかがえた。この遺構の深さは、0.1mである。

SF-4からは遺物は出土しなかった。なお、この土坑の覆土は、上述したSF-1～3とは異なるものであり、SD-3や4の覆土に近いものである。SD-3とSD-4は共に、近世の所産と考えられる遺構である。そのため、SF-4も近世の遺構の可能性がある。

(5) ＳＦ-5（図13）

SF-5は調査区の東部で検出した土坑である。この土坑は、19世紀以降の整地層を除去した段階で、検出した遺構である。SF-5の平面形は不正形な円形で、その最大径は4.0m、深さは0.8mである。遺構の北半には杭が４本、それぞれ0.3～0.5m程度の間隔で並んでいた。ただし、この杭列は整地層の上部から打ち込まれており、近代以降の杭と捉えられる。これ以外にも、SF-5は整地時に影響を受けていると考えられ、本来的な形状や規模を留めているとは言えない。覆土は灰色粘土と灰色シルトの互層であり、この遺構の北側に位置するSR-3の堆積土には見られないものである。SF-5からは、底面付近から漆器が出土した。漆器は８個体分が確認できたが、この内１個体は残存状況が著しく悪く、取り上げは不可能であった。また、残る７点の内の１点についても、残存状況が悪く図示するに能わなかった。

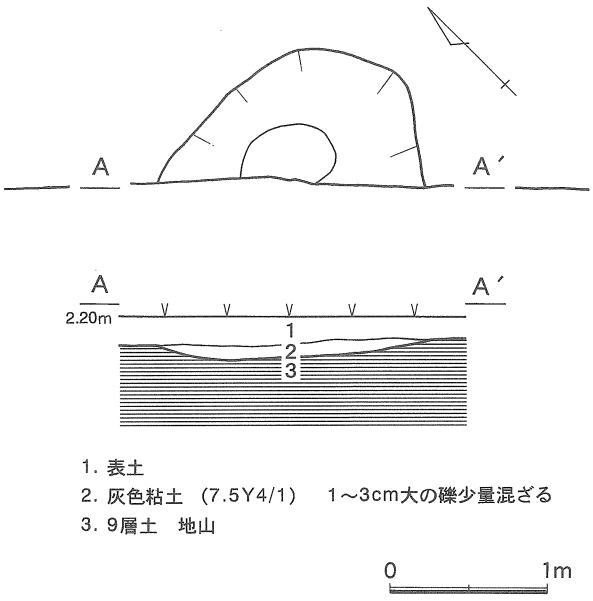


図12　ＳＦ-4遺構実測図（1/50）

出土したのはいずれも椀である（図20－12～17）。

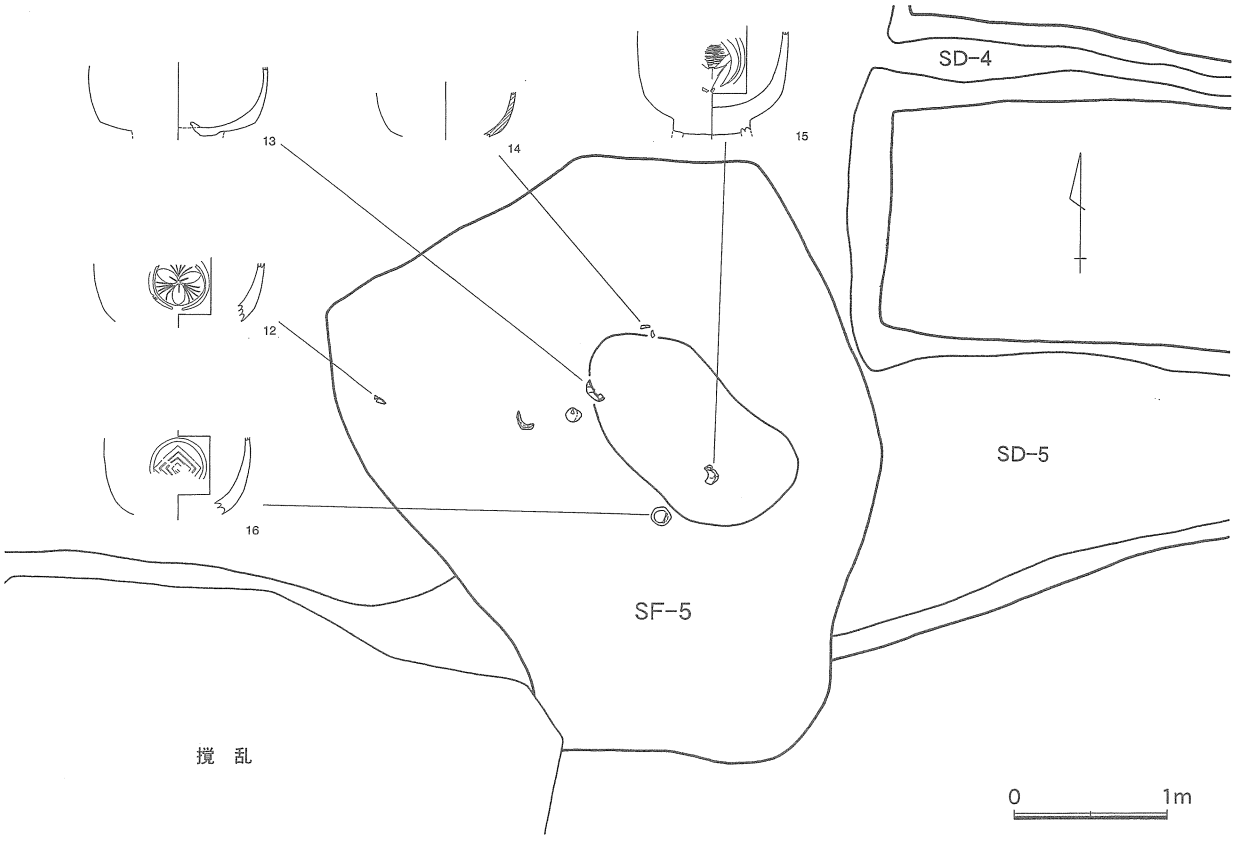


図13　ＳＦ-5遺物出土状況図（1/50、遺物：１/６）

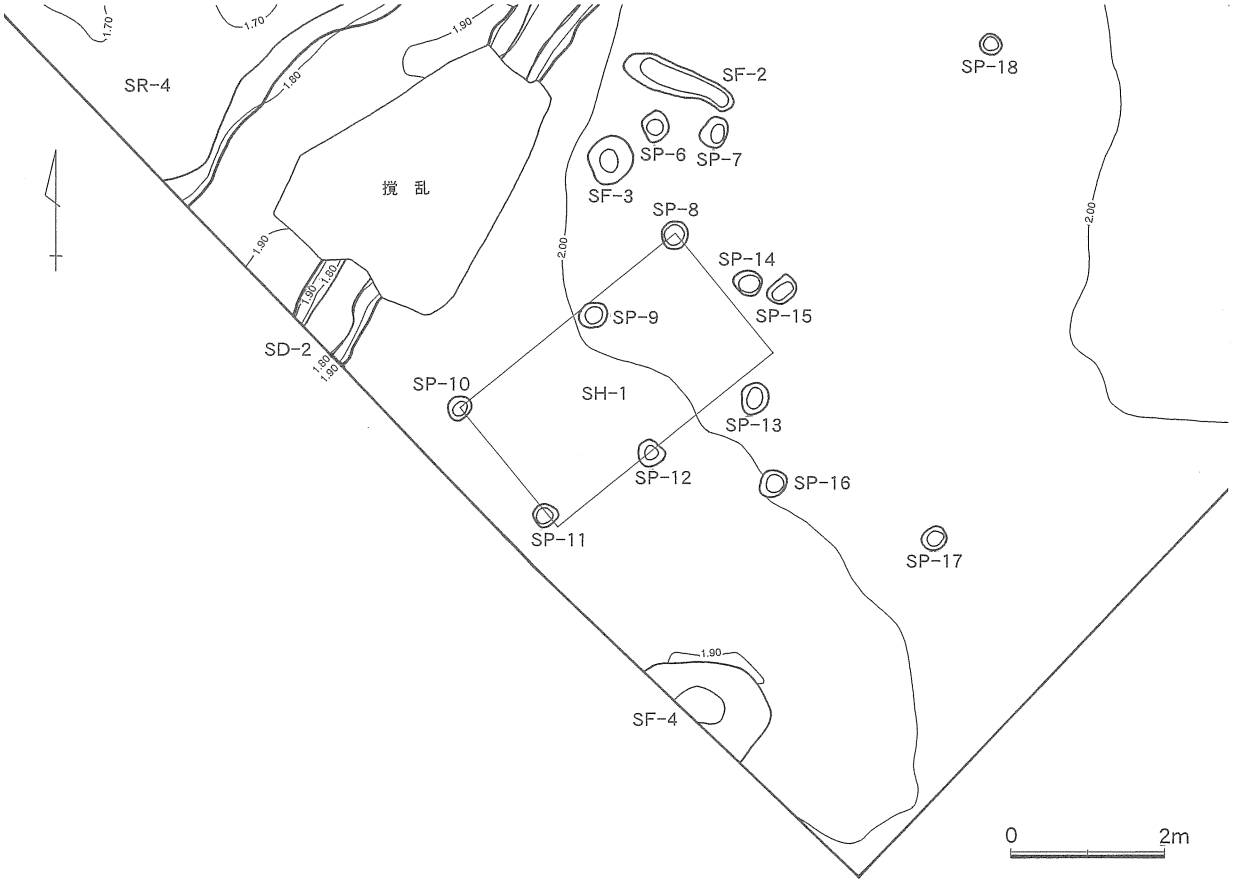


図14　調査区南部平面図（1/100）

これらについては、詳細な時期をうかがい得ないが、戦国期末～近世のものと捉えられる（註４）。そのため、SF -5の時期は戦国期末～近世に求めることができる。ただし、SF -5は遺構というよりも、むしろ流路の澱み的なものであったと考えられる。

３　掘立柱建物跡（図15）

SH -1は調査区南部で検出した掘立柱建物跡と考えられる遺構である。2.3m南東にはSF -4が存在する。この掘立柱建物は桁行１間、梁行２間で、桁行き方位はＮ -50°- Ｅである。規模は桁行4.0m、梁行2.6m、柱穴間距離は桁間が1.8～2.3m、梁間が1.5～2.2mである。柱穴規模は直径0.3～0.4m、深さ0.05～0.25mである。柱穴の覆土は黄灰色あるいは暗黄灰色の粘土で、直径１～３㎝程度の礫が僅かに混ざるものであった。

この掘立柱建物跡の柱穴の内、SP -11からは遺物が出土した。出土したのは須恵器の坏の細片である。覆土中からの出土であり、流れ込みによるものと考えられる。この遺物からは時期を特定し難いが、過去の調査成果を踏まえると、SH -1は鎌倉時代前半の遺構と考えられる。

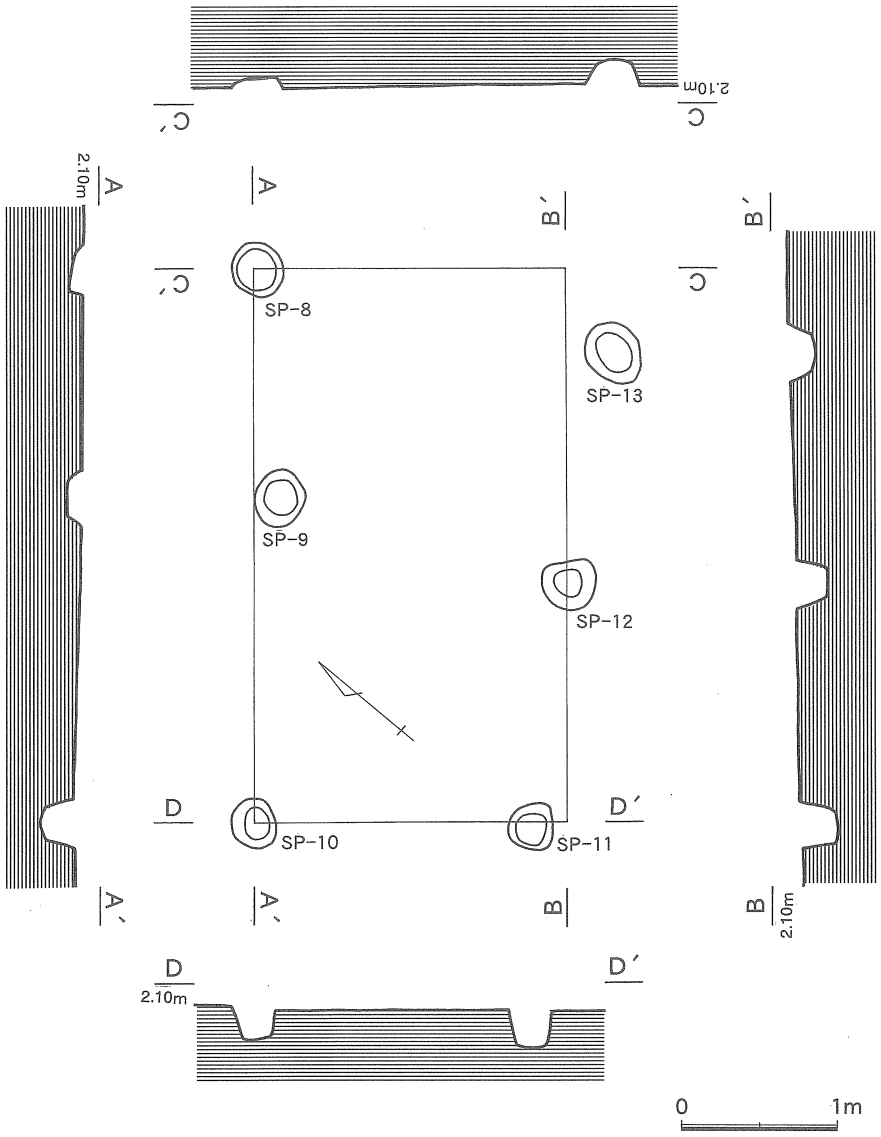


図15　ＳＨ-1実測図（1/50）

４　流路跡

(1)　ＳＲ-1（図９・16）

SR -1は調査区の中央部で検出した流路跡である。この流路跡は北へ向かって流れていた自然流路と考えられる。なお、北側は調査対象範囲外へと続いているが、確認調査では調査対象範囲の北側は一面の深い流路であったことが判明しており、SR -1はその南端部と考えられる。SR -1は検出長12.6m、最大幅は6.6m、深さは0.5mであった。

SR -1からは、山茶椀や土師器が出土したが、いずれも細片であり、図示し得るものでなかった。

SR -1が形成された時期としては、この流路がある程度埋没した段階で形成されたと考えられる自然流路跡のSR -2において、遺構底面から13世紀前葉～中葉に位置づけら

れる山茶椀が出土していることを勘案すると、SR -1は13世紀前半代に形成されたものと考えられる。

⑵　ＳＲ-2（図９・16）

SR -2は調査区中央部で検出した流路跡である。この流路はSR -1がある程度埋没した段階で形成された自然流路と考えられ、検出長は21m、最大幅は11mであった。深さは南側が0.1m、北側が0.2mであり、高低差は少ないが、南から北へ向かう流れであったことがうかがえた。SR -1と同様に北側は調査区外に続いている。

この流路跡の最下層は６層土であり、最下層からは山茶椀が出土した（図19－８～10）。６層土の上に堆積する層からも山茶椀や木器（図19－11）、近世陶磁器が出土している。更に、19世紀以後の整地時における撹乱が流路の北半には入り込んでいた。これらのことから、SR -2は鎌倉時代前半にSR -1が堆積した段階で、幅を増したもので、近世まで存続したものと考えられる（SR -4）。ただし、近世においては流路というより、むしろ水が溜まる窪みのようなものであったのであろう。なお、SD -2が南からSR -2に接続している。明白な前後関係は不明であるが、SD -2はSR -2とほぼ同時期かやや遡る時期の遺構と考えられる。

⑶　ＳＲ-3（図９、16）

SR -3は調査区の北東部で検出した流路跡である。この流路跡は調査対象範囲の北東方向に続いている様子がうかがえ、検出したのは流路の一部のみと言える。検出長は15.2m、検出幅は3.4mである。なお、深さについては、湧水が著しく壁面崩壊のおそれがあるため、遺構検出面から約２m程度掘り下げた

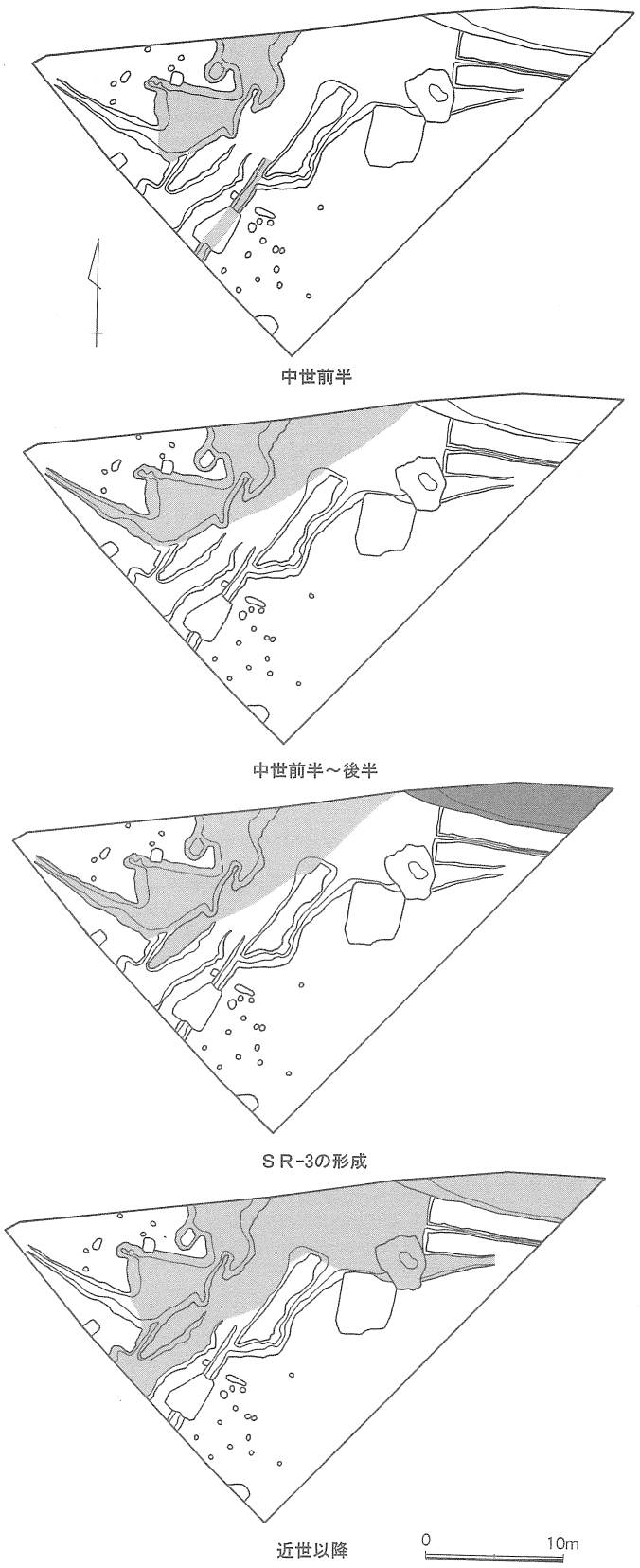
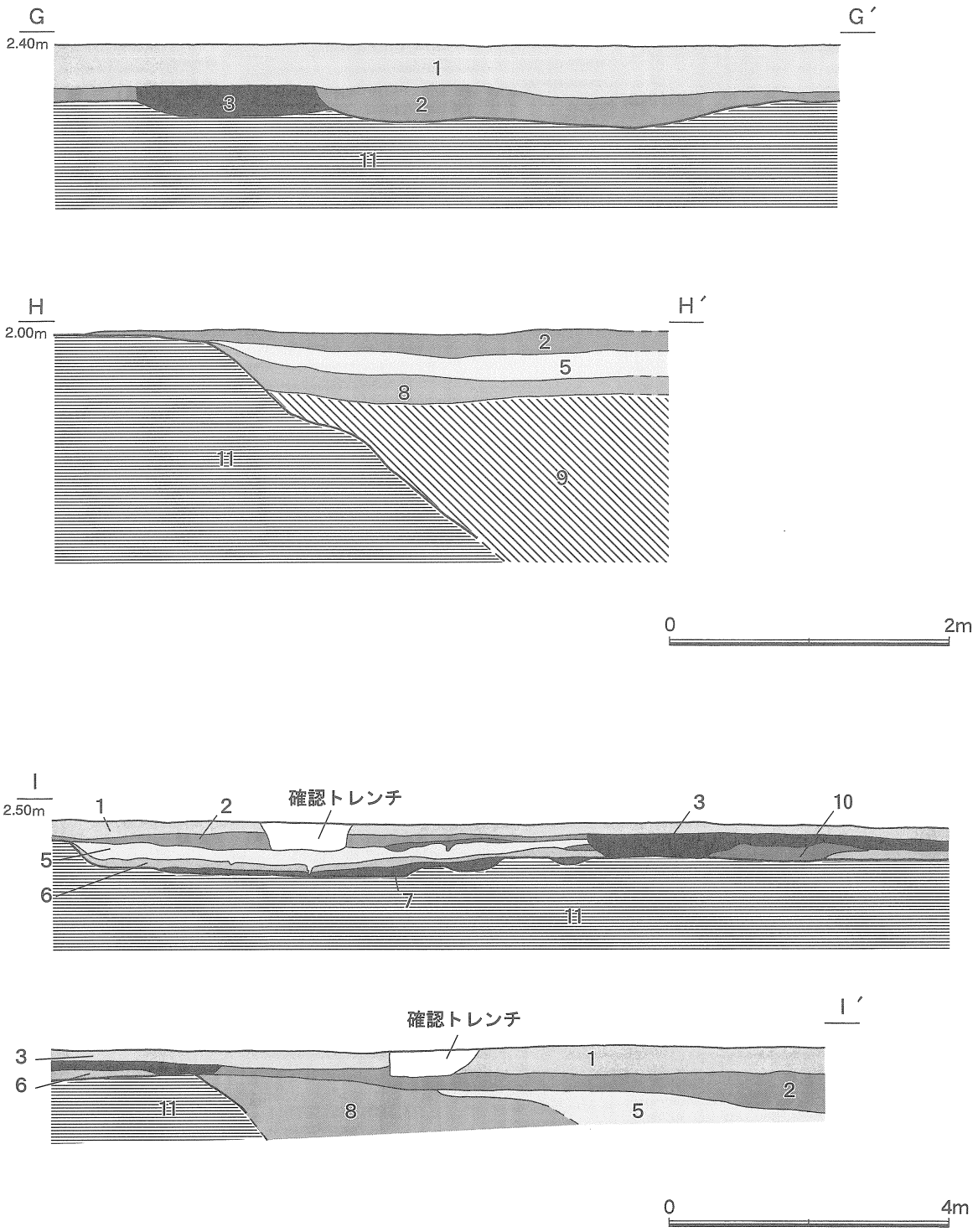


図16　流路の変遷図（1/500）



1. 表土
2. 2層土
3. 整地層
4. オリーブ黒色粘土層 (5Y3/1)　　礫混ざらない
5. 4層土
6. 6層土
7. オリーブ黒色砂層 (7.5Y3/1)　　所々砂・シルトのラミナ見られる
8. 灰色粘土層 (7.5Y4/1)　　シルト・砂混ざる
9. オリーブ黒色粘土 (7.5Y3/1)　　1cm大の礫混ざる
10. 灰色砂礫層 (5Y4/1)　　1～3cm大の礫主体
11. 9層土　地山

図17　ＳＲ-1～3土層断面図 (1/50・1/100)

段階で掘削を断念した。少なくとも、河床までは更に１m以上あると考えられる。

遺物は山茶椀と土師器の細片が出土した。いずれも、摩滅が著しい細片であり、詳細をうかがうことはできなかった。ただし、土師器については、胎土が平成12年度・14年度の調査で出土した駿東型の甕に似たものであった。SR -3は時期を知る手がかりに乏しいが、SR -2よりは後出し、19世紀以降の整地以前よりは遡る時期のものと捉えられ、近世の所産であると考えられる。

⑷　ＳＲ-4（図９・16）

SR－４は調査区の南西部で検出した流路跡である。SR -2がある程度堆積した時点で、南西側から流れ込んだ自然流路と考えられる。南西部側は調査区外に続いていることが確認できた。検出長は8.0m、南西端部での幅は4.4m、深さは0.2mである。

この遺構覆土からは遺物が出土しなかったが、撹乱土中からは、近世以後の陶磁器類が出土している。流路の形成時期については、中世～近世であることは確実であるが、SR -2に後出するものであることや、覆土が２層土であること等を勘案すると、近世以後のものである可能性が指摘できる。

⑸　その他の遺構

平成16年度における藤守遺跡の調査では上述した遺構以外にも、13基のピットを検出した。このうち、５基が調査区北西部、８基が調査区南部のSH -1周辺に所在する。規模は直径0.2～0.4m、深さ0.1～0.4m程度である。いずれのピットからも出土遺物はなかったため、時期を特定し難いが、過去の調査事例や調査区内における出土遺物の時期等を勘案すると、鎌倉時代前半の遺構の可能性が考えられる。

表２　掘立柱建物跡計測表

遺構名	検出グリッド	桁行方位	規模(m)		梁間	桁間	検出面標高(m)	備考
			桁行	梁行				
SH -1	b -5(S)	N -50°- E	4.0	2.6	1.5～2.2	1.8～2.3	1.95	平成12・14年度の調査では33棟の掘立柱建物跡が発見されているため、通し番号ではSH -34となる。

表３　土坑・小穴計測表

遺構名	検出グリッド	直径（cm）		深さ(cm)	備考
		長径	短径		
SF - 1	c -4(N)	90	50	10	
SF - 2	b -5(N)	150	40	5	
SF - 3	b -5(N)	60		20	
SF - 4	b -5(S)	170		10	
SF - 5	c -6(N)	400		80	漆椀出土
SP - 1	c -4(N)	32		5	
SP - 2	c -4(N)	38		7	
SP - 3	c -4(N)	32		4	
SP - 4	c -4(N)	32		4	
SP - 5	c -4(N)	34		10	
SP - 6	b -5(N)	42		19	
SP - 7	b -5(N)	42		17	

遺構名	検出グリッド	直径（cm）		深さ(cm)	備考
		長径	短径		
SP - 8	b -5(N)	38		17	SH -1の柱穴
SP - 9	b -5(N)	38		19	SH -1の柱穴
SP -10	b -4(S)	34		19	SH -1の柱穴
SP -11	b -5(S)	34		20	SH -1の柱穴 須恵器片出土
SP -12	b -5(S)	33		20	SH -1の柱穴
SP -13	b -5(S)	42		15	SH -1の柱穴
SP -14	b -5(N)	39		18	
SP -15	b -5(N)	40		21	
SP -16	b -5(S)	39		17	
SP -17	b -5(S)	34		22	
SP -18	b -5(N)	26		5	

第5節　遺　　物

遺物は山茶椀をはじめ、近世陶磁器、漆器、銭貨が出土した。遺物を出土した遺構はSD-1～3・5、SR-1～3、SP-12、SF-2・3・5である。しかし、いずれの遺構においても出土点数は少なく、SD-1・3、SP-12、SF-2・3から出土した遺物については、細片であり図示するに能わないものであった。また、溝状遺構や流路跡から出土した遺物は、遺構の性格上、細片である上に表面の摩滅・風化が著しいものであった。SF-5からは漆器がまとまって出土したが、これらについても残存状況は良好とは言い難いものである。溝状遺構や流路から出土した山茶椀はいずれも東遠江で生産されたもので、12世紀中葉～13世紀中葉に位置づけられる。陶磁器類は流路の他、整地層から出土し、18世紀～19世紀に位置づけられる。以下、出土遺物について遺構別に記す。

1　溝状遺構の出土遺物（図18－１～６、図19－７）

１はSD-3から、２～６はSD-2とその周辺から出土した遺物である。このうち、１・２・５は底面から出土した。１～４は山茶椀で、１～３は椀、４は小椀である。いずれも底部のみの残存であった。４点とも東遠江で生産されたもので、焼成は良好で灰色あるいは灰白色を呈する。高台には１と２はスノコ痕。３は籾殻痕が確認できる。１～３はⅢ期に位置づけられ、13世紀前半～中葉の所産と考えられる。４はⅠ期に位置づけられる。５は渥美産の甕である。残存したのは口縁部の一部のみであり、全貌は不明である。６は砥石である。残存規模は長さ8.8cm、幅4.6cm、厚さ4.0cmである。三面が砥面となっている。

７はSD-5から出土した山茶椀である。残存したのは底部のみであるが、高台にスノコ痕、見込みに重ね焼き痕が確認できる。焼成は良好で、灰白色を呈する。東遠江で生産されたもので、Ⅲ期-１～２に位置づけられ、13世紀前葉～中葉のものと考えられる。

2　ＳＲ-2の出土遺物（図19－８～11）

SR-2からは８～10の山茶椀と11の木器が出土した。８～10は底面から、11は覆土中からの出土である。８～10の山茶椀はいずれも椀で、東遠江系のものである。９と10は底部のみの残存であったが、８は全

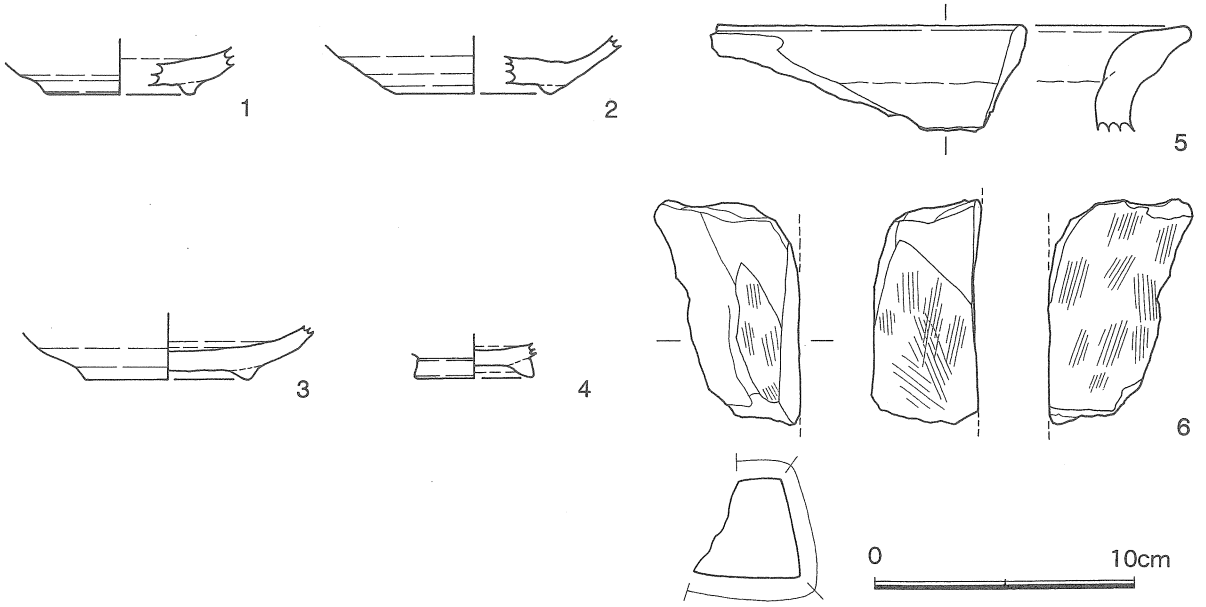


図18　ＳＤ-2・3とその周辺の出土遺物

体の様子をうかがうことができた。いずれも焼成は良好で灰色系の色調を呈する。Ⅲ期-１～Ⅲ期-２に位置づけられ、13世紀前葉～中葉のものと考えられる。11は残存状況が悪いが、曲物の底板と考えられる木器である。直径は13.0cmと推定され、厚さは0.7cmである。11は８～10の山茶椀と出土層位が異なり、時期を違えるものと考えられる。

３　ＳＦ-5の出土遺物（図20－12～17）

SF -5からは12～17の漆器が出土した。いずれも椀である。この他に、別個体と考えられる漆器片２点が存在した。この内、１点については残存状況が非常に悪く取り上げは不可能であった（図版５-２）。

いずれも木胎で、12～14は総赤色、15～17は内面赤色外面黒色である。12～14・16は体部下半、15は高台から体部下半にかけて、17は体部の極一部が残存した。器径は11.0～14.0cmである。

供伴する土器等が無いものの、これらの漆器の時期については、総赤色と内面赤色のもののみであることや、SF -5は19世紀以降の整地層を除去したところ検出できた遺構であることを勘案すると、戦国期末～江戸時代の所産であろう。（註５）

４　その他の出土遺物（図20－18～28）

18は４層土から出土した須恵器の坏身である。残存したのは口縁部の極一部であるが、TK217～46型式併行期のものであることがうかがえ、７世紀第２四半期～第３四半期に位置づけられる。

19～21は東遠江産の山茶椀である。19は表面採取したもので、20・21はSR -2の撹乱から出土した。いずれも、底部のみの残存である。19と20は見込みに重ね焼き痕があり、20は高台にスノコ痕が確認できる。３点とも焼成は良好で、灰白色ないしは白灰色を呈する。これらの山茶椀はⅢ期-１～２に位置づけられ、13世紀前半～中葉のものと言える。

22～25は近世の陶磁器類である。22・23は整地層、24は２層土、25は表土からの出土である。22の丸皿は口縁部の一部が残存したのみである。23は天目茶碗で底部から体部下半の１/４が残存した。22と23は志戸呂窯で生産されたものであり、ともに18世紀前後に位置づけられる。24はカワラケで全体の１/４が残存した。江戸時代の所産と考えられる。25は瀬戸・美濃窯で生産されたと考えられる擂鉢である。口縁部の一部が残存したのみであるが、18世紀後半に位置づけられる。26は常滑産の甕である。残存したのは体部上半から頸部の一部であり、時期は特定し難い。27・28は寛永通宝である。27はSR -2の整地層、28は撹乱からの出土である。

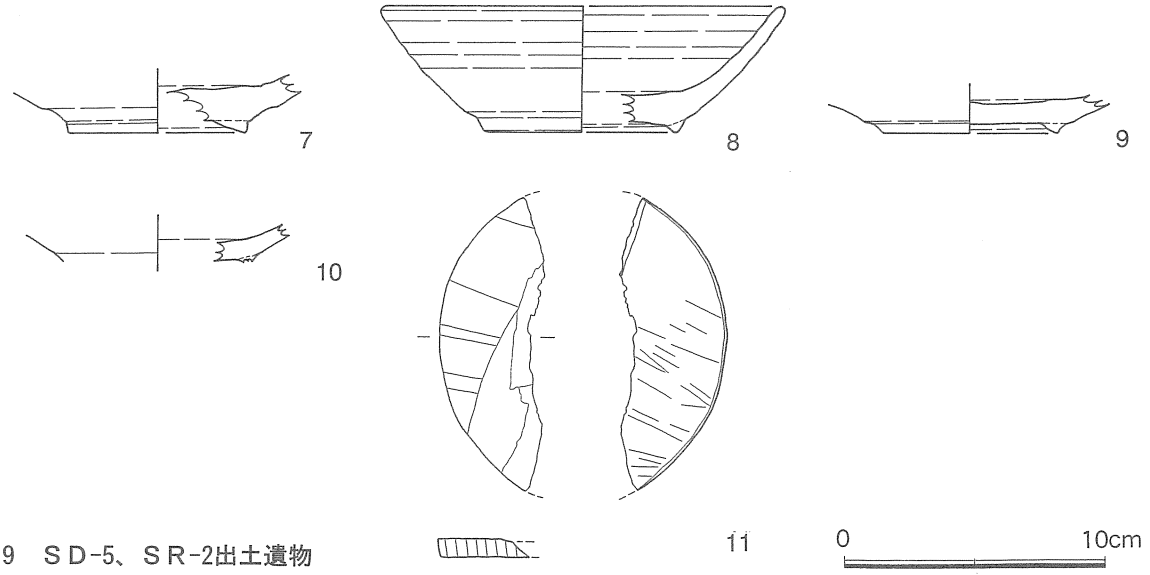


図19　ＳＤ-5、ＳＲ-2出土遺物

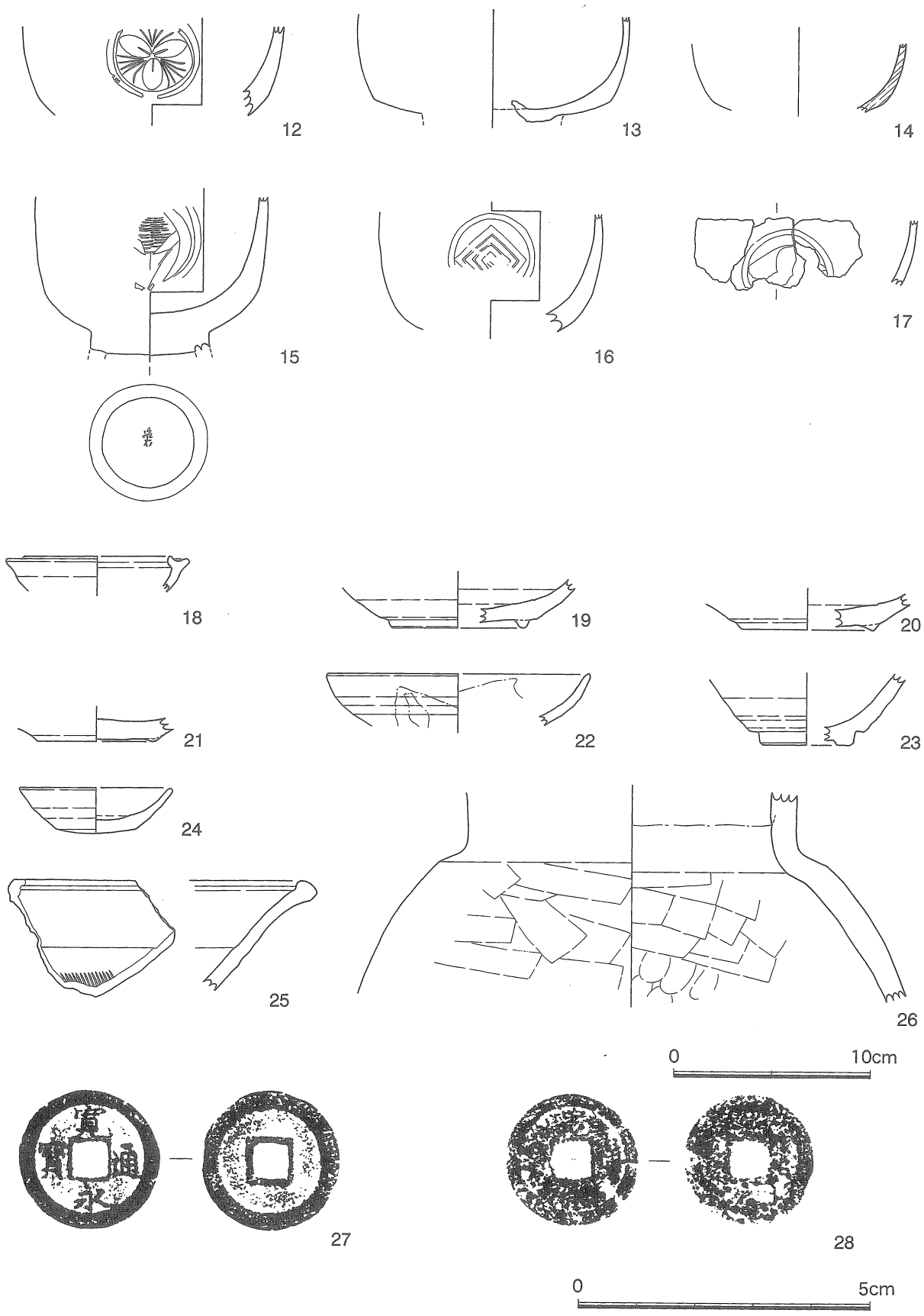


図20　ＳＦ-5出土漆器とその他の出土遺物

第４章　総　　括

１　平成16年度の調査成果

平成16年度における藤守遺跡の調査では、古墳時代後期～近世の遺物と、中世～近世の遺構の存在が明らかとなった。しかし、遺構・遺物共に残存状況は悪く、平成12年度・14年度の調査に比べると、得られた成果は少ないものであった。調査成果の概要については第３章第１節に記したが、平成12年度・14年度の調査成果を援用したうえで、改めて以下に記す。

古墳時代　今回の調査において、最も古い時期に位置づけられるのは、古墳時代後期の遺物である。その遺物とは須恵器で、受部を有する坏身の破片である。TK217～46型式併行期に位置づけることができ、時期を７世紀中葉前後に求めることができる。

平成12年度・14年度の調査では古墳時代末期～奈良時代（註６）の集落跡の存在が明らかとなっている。この時期の遺構としては、竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡、土坑、小穴、溝状遺構、流路跡等が調査されており、遺物は土師器や須恵器の他、木製品が出土している。遺構のほとんどは、平成12年度の調査範囲内で検出され、平成14年度の調査対象範囲では僅かに土坑が１基検出されているのみである。遺構・遺物ともに、平成16年度の調査対象範囲とは、やや離れた地点に集中している。以上のことから、今回の調査対象範囲までは、古墳時代末期～奈良時代の集落域が及んでいなかったものと考えられる。平成16年度の調査で出土した須恵器は、周囲からの流れ込みによるものであろう。

鎌倉時代以降　今回の調査では、掘立柱建物跡を１棟、溝状遺構を５条、流路跡を４条、土坑を５基の他、小穴を検出した。これらは全て鎌倉時代以降の所産と考えられる遺構である。遺物についても、上述した須恵器以外の遺物は鎌倉時代以降の物である。

時期がほぼ特定できる遺構は、SD -2と SR -2である。共に13世紀前葉～中葉に位置づけられる山茶椀が遺構底面から出土している。このうち、SD -2についてはSR -2に先行するものと考えられることから、13世紀前半～中葉の遺構と位置づけられる。SR -2については、SR -1がある程度、埋没した段階で幅を増した自然流路跡と考えられる。そのため、13世紀前半代にSR -1が形成され、13世紀前半～中葉にSR -2が形成されたと捉えられる。また、SR -2には南西からSD -1がつながっている。SD -1の覆土はSR -2の最下層に近いものであるため、SD -1はSR -2と同時期の遺構と考えられる。

SR -3については、２層土と３層土が上部を覆っているが、６層土が確認できないこと、SR -3の一部には19世紀以後の整地層が被覆していることが確認できた。そのため、SR -3は６層土の堆積以後に形成された中世～近世の流路跡と考えられる。また、SF -5も19世紀以後の整地層で覆われていた。この土坑については、底面から戦国期末～近世の漆器が出土していることから、戦国期末～近世の遺構と考えられる。なお、当該期の漆器については、藤守遺跡のみならず大井川町では初出土であり、注目できる遺物である。SD -3～5は、時期を特定する手掛かりに乏しいが、覆土が４層土と似ているため、近世の遺構と考えられる。なお、SR -1とSR -2については、最終的には、19世紀以降に整地され、その後も何度かの整地あるいは撹乱を受けている。おそらく、近世以降も水が溜まり易い場所であったと考えられ、この時期のものがSR -4と考えられる。

SH -1では、SP -11から須恵器の細片が出土しており、古墳時代以後の遺構と言える。ただし、古墳時代の集落跡の中心は平成12年度の調査区近辺にあることや、今回の調査区に近い平成14年度の調査で検出されたのは中世の集落跡であること、近世以降の建物に関わる遺構は未だ検出されていないことを勘

案すると、SH -1は中世の掘立柱建物跡と考えられる。柱例の方位をみると、平成12年度・14年度に調査された掘立柱建物跡はN -20～30°- E前後であるのに対し、SH -1はN -50°- Eであり、若干方位が異なる。ただし、平成14年度の調査でもSH -13のように、N -48°- Eに桁行方位をとる掘立柱建物跡は存在する。SH -1周辺や調査区西部の土坑・小穴については、出土遺物から時期を特定することはできない。覆土をみると、SF -4は覆土が３層土と似るため、新しい時期のものと考えられる。SF -1～3や他の小穴については、覆土がSH -1の柱穴と近似するため、中世の遺構と考えられる。

以上をまとめると、SH -1、SD -1・2、SR -1・2、SF -1～3は中世の遺構、SD -2、SR -1が13世紀前半の所産。SD -3～5、SR -3・SR -4、SF -5は戦国期末～近世以降の遺構と捉えられる。今回調査を実施した範囲は、平成12・14年度の調査で検出した中世の集落跡の北端部であったと捉えられる。今回の調査により、藤守遺跡東部における中世集落の範囲をほぼ特定できたともに、集落の北を限るように、深い自然流路が存在したことが明らかとなった。なお、この時期の遺物として、図示しなかった破片を含めて山茶椀が23点出土しているが、いずれも東遠江で生産されたものであった。湖西・渥美産の山茶椀が一定量含まれていた平成12・14年度の調査とは若干様相が異なる。

２　ま と め

当研究所が実施した藤守遺跡に関る３件の調査では、古墳時代後期～奈良時代、平安時代末～鎌倉時代前半の集落跡の展開を明らかにすることができた。

ところで、藤守遺跡の所在する藤守地区については、文献史学において研究の俎上に上げられている。島田市1978では、「藤守郷」は『倭名類聚抄』等には記載が見られない郷名であることから、『倭名類聚抄』が記された時代以前には集落の発達はなく、新たに開かれた地であることを指摘している。また、藤守郷は南禅寺領初倉荘の中心であるが、中世後期には開発が停滞していたことも指摘されている（註７）。藤守郷の中心は平成12・14・16年度の調査対象範囲からは離れた位置にあり、安直に結びつけることはできないが、調査において古墳時代後期～奈良時代に形成された集落が平安時代前半には断絶し、平安時代後半以降に再び集落が形成されることが判明していることは注目に値しよう。また、中世後半の遺構・遺物が検出されていない点も看過できない。ただし、藤守遺跡として周知されている遺跡の範囲、藤守郷の推定範囲は広大なものであり、３件の調査で得られた成果は、藤守遺跡全体からみれば、一部にすぎない。また、条里遺構や中世以降に形成されたと言われる堤等に関わる遺構等は検出されなかった。これらを踏まえて、これまでに実施した調査で検出した集落跡が藤守郷全体の中でどの様な位置づけができるのか検討することが今後の課題であろう

藤守遺跡は沿岸部の集落跡として、その性格から大井川町のみならず、志太地域の歴史解明には欠かすことができない遺跡である。調査で得られた資料がこの地域の歴史像解明の一助になることを願うとともに、今後、藤守遺跡の調査が進展し遺跡の実体がより明らかとなることを期待したい。

表４　平成12・14・16年度の調査成果一覧

年度	年代	古墳時代後期～奈良時代	平安時代末期～鎌倉時代	中世以降
12	主な遺構	掘立柱建物跡１・竪穴住居跡９・溝４・土坑６・流路跡５	掘立柱建物跡10・溝19(区画溝含む)・土坑９・井戸跡２・流路跡２	
	主な遺物	須恵器・土師器・土馬３・土錘８・木製品(馬鍬１・鍬先１・鍬柄１・編台１・槽１・曲物３・斎串？４・カセカケ１・弓１・建築材他)・磨石？１	山茶椀・土師器・青白磁・鞴羽口１・砥石１	
14	主な遺構	土器集積１	掘立柱建物跡21・溝12(区画溝含む)・井戸跡３	脈状砂(地震痕跡)
	主な遺物	須恵器・土師器	山茶椀(墨書土器５点)・土師器・青磁・鉄滓４・砥石１・叩石１・陶錘１	
16	主な遺構		掘立柱建物跡１・溝３・土坑３・流路跡２	流路跡３・土坑２
	主な遺物	須恵器	山茶椀・砥石１	陶磁器・漆器椀８・木製品

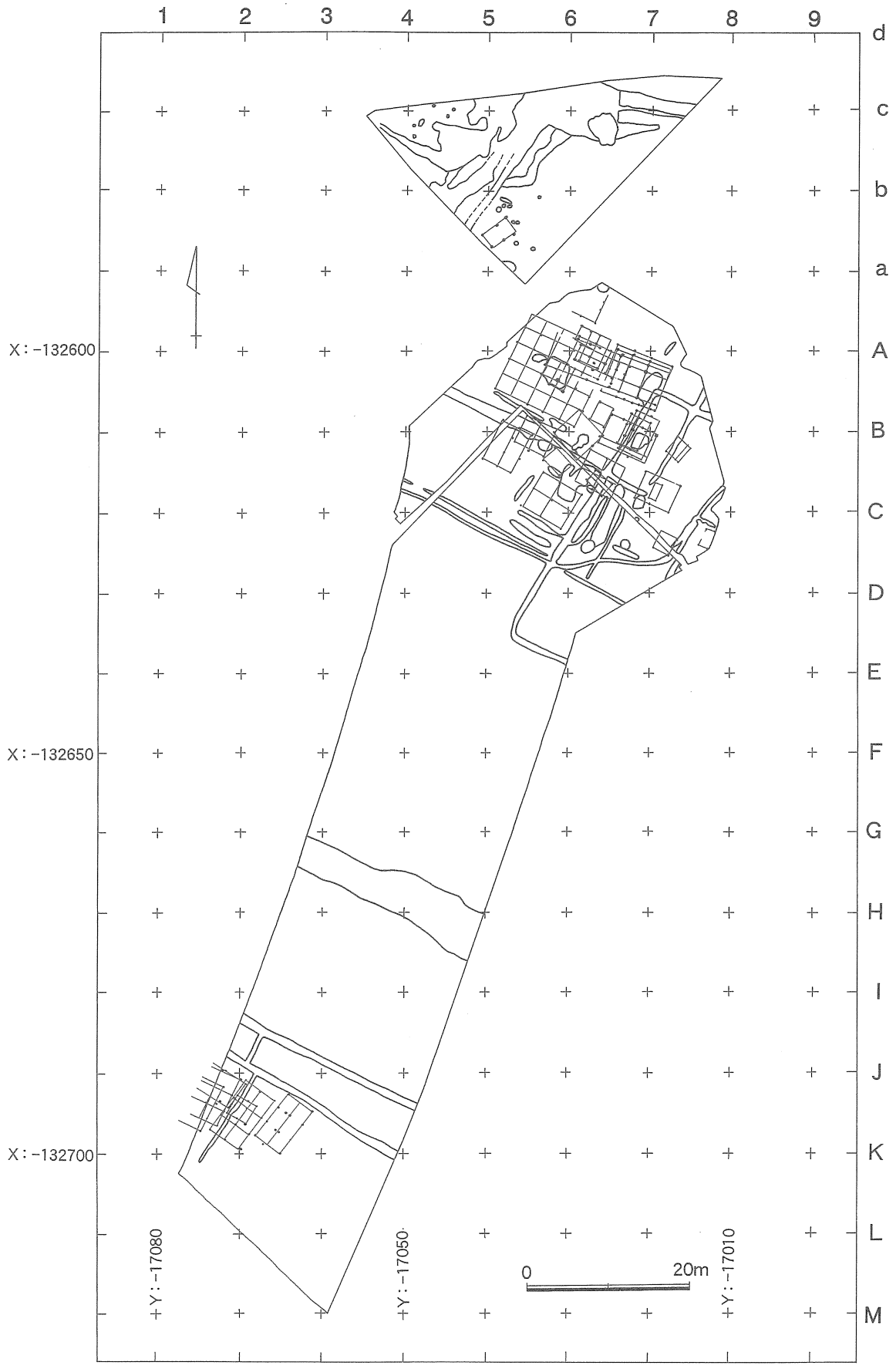


図21　藤守遺跡全体図（1/2,000）

表５　出土遺物計測表

遺物番号	挿図	遺構(層位)	グリッド	種　別	器種	口径(cm)	器高(cm)	高台径･底径(cm)	色　調	高台圧痕	残存状況	備　考	図版
1	18	SD-3(底面)	b-5(S)	山茶椀	椀	—	(2.2)	5.9	灰色(N6/0)	スノコ	底部1/3	底部糸切痕	—
2	18	SD-3(底面)	b-5(N)	山茶椀	椀	—	(1.8)	5.3	灰色(N6/0)	スノコ	底部1/8	底部糸切痕	—
3	18	SR-1(撹乱)	b-4(N)	山茶椀	椀	—	(2.1)	6.4	灰白色(N7/0)	籾殻	底部1/3	底部糸切痕	7
4	18	SR-1(下層)	c-4(S)	山茶椀	小椀	—	(1.3)	4.6	灰色(N6/0)	—	底部1/4	—	—
5	18	SD-3(底面)	c-5(S)	陶　器	甕	—	(4.0)	—	灰白色(N7/0)		口縁部細片	渥美産	7
7	19	SD-5(底面)	c-6(N)	山茶椀	椀	—	(2.2)	6.7	灰色(N6/0)	スノコ	底部1/4	見込み重ね焼き痕	7
8	19	SR-2(底面)	c-5(N)	山茶椀	椀	15.0	7.1	4.9	灰白色(N7/0)	—	1/8	—	7
9	19	SR-2(底面)	d-5(S)	山茶椀	椀	—	(1.5)	6.7	灰白色(N7/0)	—	底部1/3	底部糸切痕	—
10	19	SR-2(底面)	c-5(N)	山茶椀	椀	—	(1.4)	—	にぶい黄灰色(10YR6/3)	—	底部1/8	底部糸切痕	—
18	20	表土	d-7(S)	須恵器	坏身	7.5	(1.8)	—	灰色(N6/0)	—	口縁部1/8	最大径9.4cm	—
19	20	表面採取	—	山茶椀	椀	—	(2.6)	6.6	灰白色(N7/0)		底部1/4	見込み重ね焼き痕 底部糸切痕	—
20	20	SR-2(撹乱)	d-6(S)	山茶椀	椀	—	(1.9)	6.6	灰白色(N7/0)	スノコ	底部1/4	見込み重ね焼き痕	—
21	20	SR-2(撹乱)	c-6	山茶椀	椀	—	(1.3)	5.9	灰色(5Y6/1)	—	底部1/3	底部糸切痕	—
22	20	整地層	c-6(N)	近世陶器志戸呂	丸皿	13.6	(2.7)	—	にぶい橙色(7.5YR5/3)		口縁部1/12	釉：黒褐色(7.5Y5/3)	—
23	20	整地層	d-6(S)	近世陶器志戸呂	天目茶碗	—	(3.7)	4.4	灰白色(N7/0)		底部1/4	釉：オリーブ黒色(7.5Y3/1)	—
24	20	２層土	c-3(S)	カワラケ	小皿	7.8	4.1	2.4	橙色(5YR6/6)		1/4	—	—
25	20	表土	d-5(S)	近世陶器瀬戸・美濃	擂鉢	—	(5.5)	—	灰白色(5Y8/1)	—	口縁部細片	釉：赤褐色(5YR4/6)	—
26	20	表土	—	陶　器	甕	—	(10.75)	—	褐灰色(7.5YR4/1)	—	体部～頸部1/6	常滑産	—

註

1　平成12年度以前の調査については、㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所2002参照
2　平成15年度までは(主)焼津榛原線緊急地方道路改築(Ｂ)工事という名称で工事を実施している。
3　山茶椀については、松井1989・1993、河合2001を参照した。
4　漆器については四柳1994・1995を参照した。また、静岡県教育委員会文化課　河合修氏、溝口彰啓氏からも御教示頂いた。
5　出土した漆器については、平成17年度に保存処理と塗膜分析・樹種同定を行う。
6　平成12年度・平成14年度の調査成果は静文研2002・2003にそれぞれ基づく。
7　黒田日出男　1969

参考文献

大井川町　1984　『大井川町史』上巻
河合　修　2001　「青灰色のうつわ　～榛原郡金谷町横岡字釜谷の灰釉系陶器について～」『研究紀要』第８号　静文研
黒田日出男　1969　「中世後期の開発と村落―南禅寺領遠江国初倉荘―」『歴史学研究』第346号　青木書店
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002　『藤守遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第131集
財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003　『藤守遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第139集
静岡県　1994　『静岡県史』通史編１　原始・古代
島田市　1978　『島田市史』上
島田市史編さん委員会　1996　『島田風土記　ふるさと初倉』
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
松井一明　1989　「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
松井一明　1993　「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25　静岡県考古学会
四柳嘉章　1994　「三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析」『御殿川流域遺跡群』Ⅱ　静文研
四柳嘉章　1995　「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

文末ではあるが、現地調査ならびに資料整理において、下記の方々と機関に御指導・御協力頂いた。記して感謝の意を示したい。(五十音順、敬称略)

河合　修、河野義行、柴田　稔、篠ヶ谷路人、溝口彰啓、大井川町教育委員会

図　　版

図版　1

平成16年度調査区全景（北東から）

平成12・14・16年度　藤守遺跡調査範囲合成写真

図版 3

1　ＳＤ-1全景（東から）

2　ＳＤ-3全景（南から）

3　ＳＤ-4全景（東から）

4　ＳＤ-2土層断面（南から）

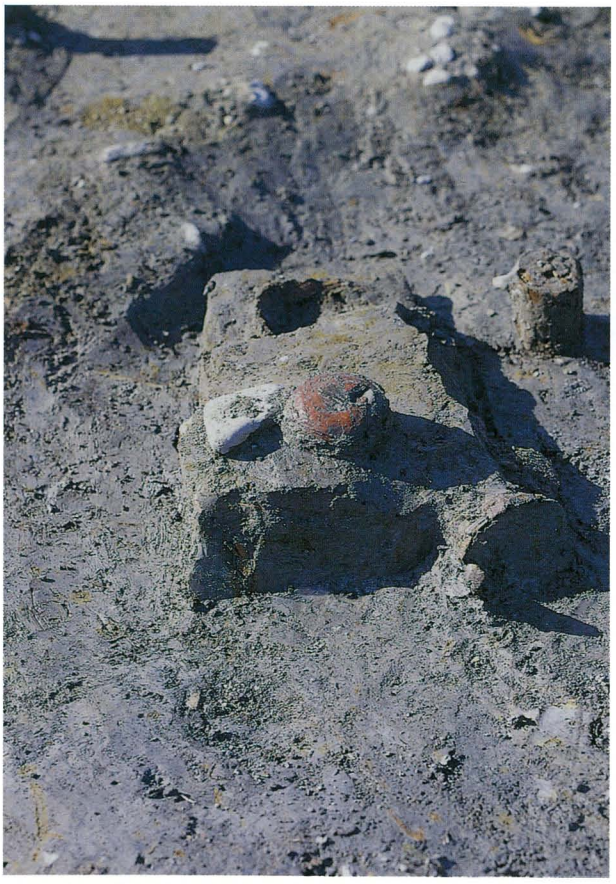
5　ＳＤ-3土層断面（北から）

1　ＳＲ-1全景（北から）

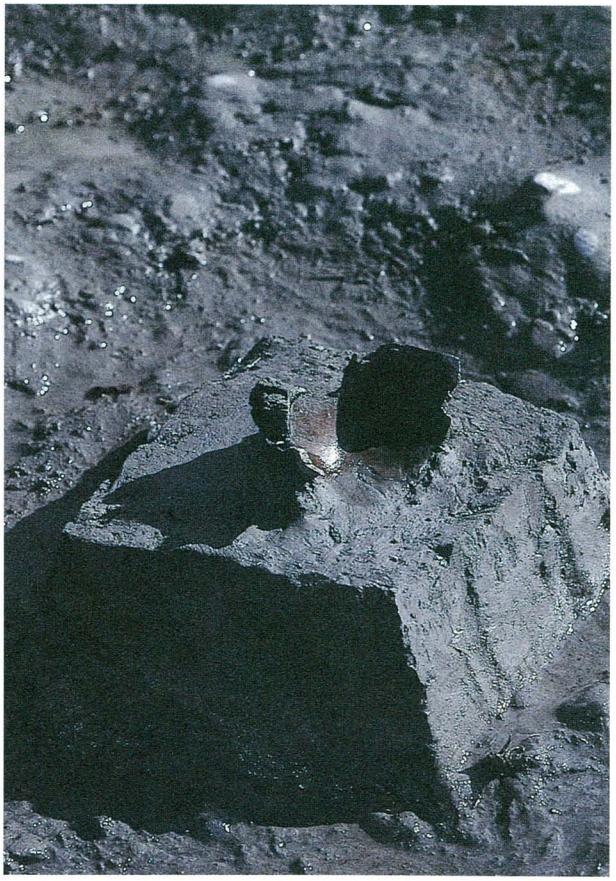
2　南部の柱穴群（西から）

図版 5

1　ＳＦ-5漆椀（13）出土状況（北から）



2　ＳＦ-5漆椀出土状況（東から）



3　ＳＦ-5漆椀（15）出土状況（西から）

ＳＦ-5出土の漆椀（外面）

15内面

15底面

図版 7

8

6

3

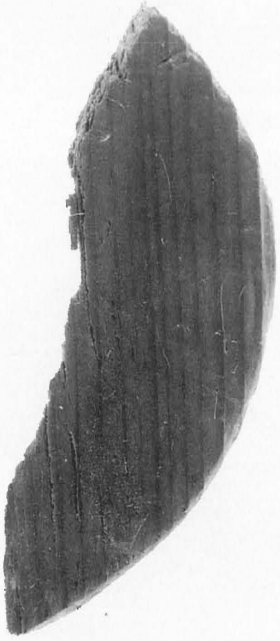
7

5

27

28

11



11

ＳＤ-2・ＳＲ-2他の出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふじもりいせきさん
書名	藤守遺跡Ⅲ
副書名	平成16年度　（国）150号道路改良（地域連携２Ｂ）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第163集
編著者名	菊池吉修
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23－20　TEL　054－262－4261㈹
発行年月日	西暦2005年３月25日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤守遺跡（ふじもりいせき）	静岡県志太郡（しずおかけんしだぐん）大井川町藤守（おおいがわちょうふじもり）1476－２他	22402		34度48分30秒	138度18分38秒	20041029～20041228	本調査533.6㎡ 確認調査1,950㎡（対象）112㎡（実掘）	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤守遺跡	散布地	古墳時代後期		須恵器（坏身１）・土師器	
	集落	鎌倉時代前半～近世	掘立柱建物跡１ 土坑５ 溝状遺構５ 小穴 流路跡４	山茶椀 近世陶磁器 漆器（椀８） 木製品（曲物底板１） 砥石１ 銭貨（寛永通宝２）	漆器椀は外面に加飾あり

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第163集

藤守遺跡Ⅲ

平成16年度　(国)150号道路改良(地域連携２Ｂ)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成17年３月25日発行

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23－20
TEL　(054) 262－4261 (代表)
FAX　(054) 262－4266
印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055-921-1839㈹